

妖怪イメージの固定化が妖怪文化の継承にどのような影響をもたらしたか

How the Fixation of Yokai Imagery Has Influenced the Transmission of Yokai Culture

清教学園高等学校 1年H組 置田千音

Abstract: This research explores how yokai shifted from mysterious phenomena to fixed visual characters. By analyzing Toriyama Sekien's woodblock-printed books, I tried to clarify how mass-produced images have standardized appearances of yokai. While this preserved yokai culture, it limited their original diversity. Future studies will be needed to examine its relationship with modern urban legends.

Keywords: yokai, woodblock-printed book, Sekien Toriyama, character, culture

1. 研究背景

どの世代にも「妖怪」は身近な存在だった。『ゲゲゲの鬼太郎』や『妖怪ウォッチ』など、異なる時代やメディア作品を通じて、古くからの妖怪は世代を超え共有される。しかも、妖怪を扱う異なる作品同士を比較すると、細部が違いこそすれ多くの妖怪が、おおむねの姿が同じということに気づく。

一方、京極は「妖怪」という言葉について特定の姿・形を伴う存在としてだけでなく、「そもそも不思議なコトや怪しいコトを、総じて妖怪と呼んでいたわけです」と述べ、ある現象そのものを指す言葉だったと整理する¹。もともと妖怪とはカタチのない曖昧なものだったのだ。しかし現代に生きる私たちは、そんな彼らの姿を当たり前のように想像できる。しかもその多くが共通の姿・形で定着している。モノ・コトの記述でなく、姿・形として思い描ける妖怪イメージが流布し、そしてなぜ現代のように共通する妖怪認識に繋がったか。それは今日まで残る書物における妖怪の描写や名づけ、メディアの進歩の一つに位置づけられる「版本」の登場とどうかかわるのか。本稿ではその点を明らかにする。

研究のきっかけは小学生のころに観たアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』(第5期)にある。人間とは違う、怪しく不可思議な姿に魅了された。しかし高校での妖怪研究の過程で上記京極の記述を見つけ、これまで自分が抱いていた妖怪の姿は、一種の仮初であったことを知った。ならば、なぜ、私たちが現代に描かれる妖怪の姿・形を自然と受け入れているのかが気になり、今回の研究のテーマとした。

2. 研究目的・意義

現代まで継承された妖怪イメージがいかにして、先述した絵巻物での描写・名づけ、版本による普及により固定化されたのかを検証する。これにより、近代の科学技術の台頭によって消えてもおかしくなかった「妖怪」文化が、継承されるに至った過程を明らかにしたい。主な先行研究である小松は日本の妖怪文化の豊かさを、神道などを背景にするアニミズム信仰をもととした、日本文化の思考であると述べている²。よってこの研究は日本人の思考を読み解く研究ともいえる。

3. 研究方法

- ・もともとは事象を指す言葉であった「妖怪」が、いつから存在を指す言葉になったのか。そのプロセスを、小松の先行研究等を参照しながら考察する。
- ・現在にまで引き継がれた「存在としての妖怪描写」が、過去のどの時代に生まれたのか。もっとも重要な出来事を文献調査によって探る。加えて、そこでの妖怪の姿がいかにして普及・定着していったのか、江戸時代の「版本」の登場に着目しながら整理する。
- ・上記2つの方法で妖怪イメージの固定化が妖怪文化の継承にどのような影響をもたらしたかを探る。

4. 結果・考察

妖怪は共同体の共有財産の性格も持つ。同じ文化を共有する共同体の中で、人々に共通の認識が持たれてはじめて妖怪となる³。つまり、自分と他者との間で妖怪のイメージが共有されなければ、その現象はただ個人の不思議な体験となり、妖怪として成立しない。それを小松は「怪異現象の名づけ=共有化」とした⁴。コト(=事象)からモノ(=存在)への変換に妖怪の発生を求めた。共同体の人々が経験したコトに名称を与え、姿・形を創造するプロセスが妖怪をモノに変換するのだ。

小松の「共有化」論をもとにすれば、数多ある自然現象の中から一つの怪異現象を取り出すことは「固有化」とも呼べる。(図1.A)に示すように自身が経験した出来事を「なぜそうなったのか」と検討することがすなわち、その人自身に起こった固有の現象としての性格を与える。この後に小松の言う名づけ=共有化が行われるとき、人々の間でモノ(=存在)としての妖怪が立ち現れる。

モノとなった妖怪の姿・形が多く造形化されはじめたのは中世頃だった。貴族や僧侶、商人などが

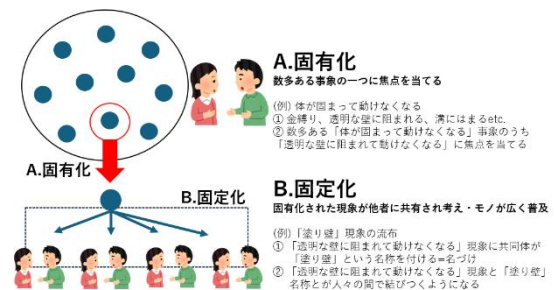


図1 妖怪の固有化と固定化(筆者作図)

多く住む京都で「絵巻」が開発されたのだ⁵。そして絵巻物は後世に受け継がれ、江戸時代の絵師、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』によって、現代の人々が想像する妖怪の姿の元が生まれた。彼は絵巻から妖怪の姿を参考にしつつ、それまで描かれなかった妖怪も新たに描いていた。さらに、続編として『今昔画図百鬼』『今昔百鬼拾遺』『画図百鬼徒然袋』を出版し、それらを小松は『画図百鬼夜行』シリーズと表現した(小松,2006)。

近世は出版文化の普及を背景に、それまで秘伝、秘匿されてきた学問、芸道等が門外に広がっていく時代であった。『画図百鬼夜行』シリーズの刊行も、秘蔵の妖怪粉本の公刊であり、妖怪画の大衆化を促した⁶。ここで重要な役割を担うのが「版本」である。版画の技術を応用した出版物である版本は、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』でも採用された。彼の残した妖怪画は大量複製が可能となり、後世の妖怪の姿・形のイメージ形成に多大な影響を与えた⁷。また、石燕の成功により、妖怪にまつわる様々な書物や絵画が創作された⁸。そうして妖怪の姿・形が描き継がれることで「この姿の妖怪はこの名前」と結びつきが強くなり、やがて一般にも浸透していった⁹。

香川はこの「名前」と「姿かたち」を備えた存在を現在の「キャラクター」にほかならないと述べた¹⁰。ここで、かつて怪異現象の総称として扱われた「妖怪」という言葉から、不確かさが完全に払拭され、姿・形を持つ存在として固定化された(図2)。キャラクターとは金水にならうとするならば、記述可能性、可搬性、複製可能性を有する“属性”の束としてとらえられる¹¹。つまり、「キャラクター」となり、時代を超えてその姿を受け継ぐことが可能になったのだ。実際に妖怪がキャラクターとしての要素をどの程度保存され現代に伝えられてきたのか、筆者がまとめたのが(表1)である。

表からは江戸時代に描かれ、版本によって普及した妖怪の姿・形は、現在の私たちが想像する形と同一であり、当時の人々が抱いたイメージが現在の私たちに浸透しているということがわかる。『画図百鬼夜行』シリーズで描かれた姿・形を元にした、水木しげるの妖怪漫画などにより、今日の「妖怪」イメージが定着する¹²。以上のことから、名づけ、書物としての妖怪描写によって妖怪の姿・形イメージは固定化され、曖昧で不確かな存在だった妖怪を後世にまで文化として受け継ぐことができたのだと考察する。

5. 結論及び今後の展望

鳥山石燕が妖怪の姿を創造し、それが一般に流通、定着したことは、文化の継承に大きく貢献した。江戸時代から現代まで妖怪たちの姿が受け継がれていることがその根拠である。一方で、従来は怪異現象として各々が考える姿があったにもかかわらず、絵巻物・版本の流通により固定化されたイメージが人々の間に流布し、そこで描かれた姿こそが正しい姿であると認識されてしまった。これにより、既存の多様な妖怪文化が失われてしまったとも考えられる。

ただ、現代における都市伝説など、新たな「妖怪らしきもの」の増加はそれなりに認められる。江戸時代から固定化され、解釈の余地がなくなってしまった従来の妖怪文化と比べても、このような新たな怪異現象が市民権を得ている要因の一つになっているのではないかと。今後は古典的妖怪のイメージの固定化と、現代の妖怪の発生の関係を考えていきたい。

引用文献・参考文献

¹ 京極夏彦(2002).「描かれた妖怪」.国立民族博物館編.池上良正 他七名著.『異界談義』.角川書店.p.79.
² 小松和彦 飯倉義之(2015).『日本の妖怪』.宝島社.p.18.
³ 京極夏彦 小松和彦(2002).「共有財産としての妖怪」.国立民族博物館編.池上良正 他七名著.『異界談義』.角川書店.p.100.
⁴ 小松和彦(2006).『妖怪文化入門』.せりか書房.p.11.
⁵ 小松和彦(2006).『妖怪文化入門』.せりか書房.p.15.
⁶ 近藤瑞木(2022).「妖怪」をいかにして描くか—鳥山石燕の方法—.小松和彦,安井眞奈美,南郷晃子編.『妖怪文化研究の新時代』.せりか書房.p.290.
⁷ 小松和彦 飯倉義之(2015).『日本の妖怪』.宝島社.p.158.
⁸ 小松和彦 飯倉義之(2015).『日本の妖怪』.宝島社.p.162.
⁹ 京極夏彦(2002).「描かれた妖怪」.国立民族博物館編.池上良正 他七名著.『異界談義』.角川書店.p.82.
¹⁰ 香川雅信(2022).『図説 日本妖怪史』.河出書房新社.p.80.
¹¹ 金水敏(2021).『《キャラクター》と《人格》について』.荒木造,前川志織,木場貴俊編.『<キャラクター>の大衆文化 伝承・芸能・世界』.KADOKAWA.p.31.
¹² 近藤瑞木(2022).「妖怪」をいかにして描くか—鳥山石燕の方法—.小松和彦,安井眞奈美,南郷晃子編.『妖怪文化研究の新時代』.せりか書房.p.280.

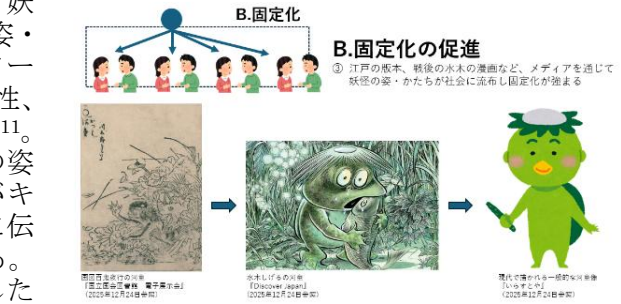


図2 妖怪の固定化(筆者作図)

名称	生息環境	生息環境	悪さ・現象	悪さ・現象	四肢	四肢	特徴的なモノ	象徴的なモノ
1 鵺	京都御所	京都御所	天皇家へのいたずら	天皇家へのいたずら	虎	虎	顔、足、尾	顔、足、尾
2 ぬらりひょん	家	家	家への侵入	家への侵入	人(商人)	人(商人)	突き出た舌	突き出た舌
3 天狗	山	山	山の精	山の精	鷹	人型	鳥天狗の嘴、鼻高天狗の鼻	鳥天狗の嘴、鼻高天狗の鼻
4 河童	水辺	水辺	尻子玉を抜く	尻子玉を抜く	人型	人型	皿、甲羅	皿、甲羅
5 鬼	山	どこでも	不明	仏教的な罰則を与える存在	人型	人型	角、こん棒、虎のパンツ	角、こん棒、虎のパンツ

表1 固定化された妖怪イメージの比較(筆者作図)

《水木しげるの妖怪 百鬼夜行展》 この夏、妖怪でひんやり。4 | 百鬼夜行展の楽しみ方 | Discover Japan | ディスカバー・ジャパン
<https://discoverjapan-web.com/article/93451>(2025年12月24日参照)
 鳥山石燕の妖怪図鑑でみる妖怪の世界 | NDLイメージバンク | 電子展示会
<https://www.ndl.go.jp/imagebank/column/sekienyokai>(2025年12月24日参照)
 鳥山石燕(2005).『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』.KADOKAWA.
 水木しげる(2004).『水木しげる 妖怪大百科』.小学館.
 水木しげる(2005).『水木しげる 妖怪百物語』.小学館.
 水木しげる 画.川上健司 編著(2005).『日本妖怪大辞典』.角川書店.
 門賀美央子 文 アマヤギ堂 画(2016).『ときめく妖怪図鑑』.山と溪谷社.
 京極夏彦(2021).『京極夏彦講演集 「おぼけ」と「ことば」のあやしいはなし』.文藝春秋.
 志村有弘(2008).『図説 地図とあらすじで読む 日本の妖怪伝説』.青春出版社.
 香川雅信(2013).『江戸の妖怪革命』.KADOKAWA.
 柳田國男(1976).『口承文芸史考』.講談社.
 笹間良彦(2005).『鬼とものけの文化史』.游子館.

焼き餃子の日本流入時期に関する歴史的考察 — 『町中華』の象徴はいかにして準備されたか—

(A Historical Study on the Introduction of Pan-fried Gyoza to Japan: How the Icon of "Machi-Chuka" was Prepared)

校成学園高等学校 2年F組 采澤 皓

Abstract: Conventional theory claims pan-fried gyoza spread in post-war Japan. However, this study re-evaluates its origin using 1920s literature. Recreating a century-old recipe proved the techniques existed pre-war. This suggests that the foundations of Machi-Chuka were both technologically and culturally prepared long before their well-known post-war explosion.

Keywords: Pan-fried Gyoza, Machi-Chuka, Food History, Historical Recipes, Cultural Continuity

1. 研究背景

町中華とは昔から地域に根差している大衆的な中華食堂のことを指し、日本各地の住宅街や駅前に存在する。我こそが元祖であると主張する店が無いと、その起源は曖昧である。中華料理の他にカレーライスやオムライスなどの中華とはあまり関係のない食べ物もメニューに多く組み込まれていることから、メニューの自由度が高いことが町中華の特徴である。当初は町中華を調査しようとしたが、範囲が広すぎたため焼き餃子が中華料理の象徴として食卓に君臨するようになった⁽¹⁾ 経緯に着目した。餃子協会によると焼き餃子は太平洋戦争後に満州から帰還した日本人によって普及したと記されていた⁽²⁾。しかし、日本は中国と古くから関わりがあるため本当に太平洋戦争後から普及したのか疑問に思い社会的な定説の打破のため調査を行った。

2. 研究目的・意義

「日本と中国は太平洋戦争以前から深い関係を持っているため、焼き餃子は戦後に日本で普及したという説は正しいのか」というリサーチクエストで調査を進めた。焼き餃子について調べることで魅力の再発掘並びに歴史的、社会的背景を明らかにする事で消えつつある町中華の食文化の価値をあげることができる。

3. 研究方法

3.1 町中華の店舗に行きインタビューを行う

焼き餃子をいつから作っているのか、どこから来たのかを作っている張本人たちに話を聞くため、有名な町中華としてしばしば名前のあがる東府中の「スガリー飯店」にてインタビューを行った。

3.2 書籍をあたる

北尾トロ (2019) 『夕陽に赤い町中華』、岩間一弘 (2025) 『中華料理と日本人』、岩間一弘 (2025) 『中国料理と近現代日本』を分析した。

4. 結果・考察

4.1 町中華に行きインタビューを行う

3代目店主によると焼き餃子は創業当時から作っているとのことだった。また、初代店主夫婦が満州のハルビンに住んでいて太平洋戦争中に帰国し、1960年にこの店を始めたこともわかった。しかし、戦時中に焼き餃子を作っていたかは分からなかった。そのため、焼き餃子が太平洋戦争終了以前に存在していた証明はできなかった。

4.2 書籍をあたる

『中華料理と日本人』(2025)によると、太平洋戦争後に満州からの帰国者が普及させたことが記されていた。帰国者の多くは渋谷や神田に餃子店を開き、餡の中にニンニクをたっぷり入れるスタイルからしばしばニンニク横丁と呼ばれるようになった⁽³⁾。餃子店と同時に焼き餃子の普及に貢献したのが町中華である。戦後直後の日本は戦争や凶作の影響で米が不足していたが、アメリカが余った小麦粉を大量に日本に輸出していたため小麦粉は豊富にあった。輸入された小麦粉は主に学校などに渡ったが、一部が闇市に出回り、ラーメンや餃子の皮に使われるようになった。もともと満州で人気があり、原料が手に入ったことでラーメンと焼き餃子を軸とした満州から帰還した人々による中華料理店の出店ラッシュが起こった⁽⁴⁾。これ以前日本においてシュウマイが中華料理の象徴だったが、安くて美味しくてスタミナのつく戦後の新メニューとして登場した焼き餃子は、戦前に定番だったシュウマイの地位を奪取するように人気を高めていった⁽⁵⁾。

山田政平の『素人に出来る支那料理』(1926)は様々な中華料理の調理法が記されたもので、鍋貼餃子(焼餃子)の調理法の記述もあった。山田政平は1926年時点で20年間中国で生活し、中華料理を研究していた人物で料理人ではないが、中国での生活で覚えた中華料理を日本に普及させたいという思いを冒頭で述べ⁽⁶⁾、焼き餃子を日本から満州に移住した人の人気料理の筆頭として紹介していた⁽⁷⁾。また、山田は1933年に「東京でも蒸したり、茹でたりする餃子はあるが鍋貼を扱う店は少ない⁽⁸⁾」と述べているのでわずかとはいえ太平洋戦争前の日本に鍋貼餃子(焼餃子)は存在していたことがわかる。

さらに歴史を遡ると、中国で餃子の原型が誕生したのは紀元前7世紀ごろであること、それが日本に伝わったのは江戸時代とわかった⁽⁹⁾。1708年に刊行された『瞬水朱氏談綺』という明朝の儒学者の著述を水戸藩の役人が編集した書物で「餃子」と記された水餃子に近いものが紹介され、後に刊行された『卓子調烹方』(1778)という書物には餃子の調理法として蒸す、焼く、揚げるの3種類が紹介されていた⁽¹⁰⁾。

ここまでの調査で、鍋貼餃子(焼餃子)が戦前から存在していたことがわかった。しかし文字が同じでもそれが現在の焼き餃子と同様のものか確証はないため、『素人に出来る支那料理』をもとに鍋貼餃子(焼餃子)を再現し、コープクッキングの焼き餃子と材料や工程を比較した。鍋貼餃子の餡は3~4人前で豚肉400g、ネギ5~6本、花椒1振り、醤油小さじ半杯、酒小さじ半杯、胡椒少々⁽¹¹⁾を使用した。結果コープクッキングと調味料の分量に若干の差はあったが、工程には差がなかった。よって山田政平が紹介した鍋貼餃子(焼餃子)は焼き餃子と同じ食べ物を指し、戦前から存在していたと言える。



図1 再現した鍋貼餃子

5. 結論・今後の展望

現在、焼き餃子のルーツについては戦後から誕生したという定説がある。しかし、私が分析した書籍、調理から焼き餃子は戦後突如現れたのではなく、太平洋戦争以前から焼き餃子のレシピ、焼き餃子を提供する店も日本国内に存在したが、満州からの帰国者によって太平洋戦争後に広められたという定説が信じられていたことから、焼き餃子は太平洋戦争以前の日本国内ではあまり知られていなかったのではないかと考えられる。「戦前にポピュラーではなかった焼き餃子が、戦後に受け入れられた理由は何か」という新たな問いに対する仮説として、「調理に必要な火力が家庭では出せなかったこと」、「当時の日本で肉食が受け入れが進んでいなかったこと」、「中華料理用の調理器具がなかったこと」の3つが考えられる。戦前の一般家庭における熱源は主に竈門や七輪で⁽¹³⁾、中華鍋を高温に保つのは困難であった。この熱源の制約が戦前の一般家庭への普及を妨げた一因であると考えられる。中華料理店では火力を必要としない蒸し料理のシュウマイが扱われ、メジャーになったのではないかと考える。

戦前にあまり普及しなかった理由を探るべく今後は「調理技術(熱源)の制約」と「社会的需要(スタミナ食への期待)の欠如」の2つの観点から戦前の日本家庭の調理環境や肉食の受容、調理器具に加えて日本における肉を小麦粉の皮で包んだ料理が中国に比べて極端に少ない事から他国との地域差を調査したい。

6. 参考文献・引用

参考文献リスト

- 北尾トロ『夕陽に赤い町中華』集英社(2019)
- 岩間一弘『中華料理と日本人』中公新書(2025)
- 山田政平『素人に出来る支那料理』(1926)
- 岩間一弘「中国料理と近現代日本」慶應義塾大学出版会(2025)
- 日本餃子協会「餃子の歴史」<https://www.nihon-gyouza.org/gyoza-hasshou/>(最終閲覧日2026年1月8日)
- TOKYO GAS GAS MUSEUM <https://www.gasmuseum.jp/guide/gasforlife/05/>

引用リスト

- 岩間一弘「中国料理と近現代日本」慶應義塾大学出版会(2025) p77
- 日本餃子協会「餃子の歴史」<https://www.nihon-gyouza.org/gyoza-hasshou/>(最終閲覧日2025年12月25日)
- 岩間一弘『中華料理と日本人』中公新書(2025) p113
- 北尾トロ『夕陽に赤い町中華』集英社(2019) p97
- 北尾トロ『夕陽に赤い町中華』集英社(2019) p64
- 山田政平『素人に出来る支那料理』(1926) pp1-2
- 岩間一弘『中華料理と日本人』中公新書(2025) p107
- 岩間一弘『中国料理と近現代日本』慶應義塾大学出版会(2025) p83
- 岩間一弘『中華料理と日本人』中公新書(2025) p103
- 岩間一弘『中華料理と日本人』中公新書(2025) p104
- 山田政平『素人に出来る支那料理』婦人之友社(1926) p93
- 山田政平『素人に出来る支那料理』婦人之友社(1926) pp1-2
- TOKYO GAS GAS MUSEUM <https://www.gasmuseum.jp/guide/gasforlife/05/>(最終閲覧日2026年1月8日)

男子高校生の部活動所属は親子の「認識のズレ」を解消するか

Does Participation in Club Activities Bridge the "Perceptual Gap" in Parent-Child Relationships?

佼成学園高等学校 2年F組 奈良 舜太郎

Abstract: Analyzing 449 pairs (N=898), this study examines whether club activities bridge perceptual gaps. Results reveal sports clubs generate a “misinterpretation of strictness” (paternal support perceived as fear), whereas cultural clubs show mutual indifference. This suggests shared topics do not resolve gaps but merely alter the nature of friction.

Keywords: Parent-Child Communication, Club Activities, Perceptual Gap, Dyadic Analysis

1. 研究の背景

現代、家庭内のコミュニケーションの希薄化が社会課題として指摘されている（内閣府、2023）。特にスマートフォンの普及は、同居家族であっても各々が異なる情報空間に没入する状況を生み出し、共通の話題による対話を困難にしている。一方で、部活動は試合や練習といった具体的な共通体験として、この分断を繋ぎ止める貴重な機会となり得る。しかし、松井（2001）が指摘した「親子の認識のズレ」が、情報環境の激変した現代において、部活動という共通項を通じて解消されるのか、あるいは新たな摩擦して顕在化するのかが検証されていない。

2. 研究目的・意義

親子関係に関する先行研究として、松井（2001）は、親と子の間に「関係性の認識におけるズレ」が存在することを指摘している。しかし、松井の研究から約25年が経過し、通信環境や部活動のあり方が激変した2025年現在において、この「認識のズレ」がどのように変化したか、あるいは維持されているかは十分に明らかにされていない。本研究では、運動部に所属する高校生と文化部、無所属の高校生とでは、コミュニケーション量に違いがあるのではないか、という仮説を立てた。そこで、中高生およびその保護者を対象としたアンケート調査を実施し、運動部所属の有無による親子関係の違いを明らかにするとともに、2001年と2025年のデータを比較することで、親子関係の変化について検討する。

3. 研究手法

2025年6月23日から6月28日まで、佼成学園中学校・高等学校（私立男子校）全校生徒及び保護者を対象に、webアンケートシステム（Google forms）を用いた質問紙調査を実施した。そのうち中高生及びその保護者計898名（生徒：290名、保護者（父）：112名、保護者（母）：497名）から回答を得た。調査項目は、松井（2001）に基づき「会話の頻度」「親の期待への認識」「家庭内の居心地」等、計10項目を4件法で測定した。分析にはt検定を用い、運動部・文化部・帰宅部の3群間及び親子ペア間での有意差を検討した。

4. 結果・考察

生徒から見た親子関係と親から見た親子関係を数値を使って求める。松井洋の先行研究に倣い、「そうである」を1、「比較的そうである」を2、「あまりそうでは無い」を3、「そうでは無い」を4と置き、それぞれの項目の平均値をとった。

4.1 生徒と保護者の認識の違い

表1から、生徒と保護者（父・母）との間には、親子関係や親の行動・態度に対する認識に多くの違いがみられた。全体として、親は自身の親子関係や行動を肯定的に捉える傾向が強い一方、子どもはそれをやや控えめに評価しており、親子間に認識のズレが存在するといえる。父子間では、「父の様になりたい」「何かと相談する」「コワイ存在」などで差が大きく、父親は自分を信頼され関与的な存在と捉えるのに対し、子どもは心理的距離のある存在として評価している可能性が示された。母子間でも「母の様になりたい」「相談する」「尊敬している」などで差がみられ、母親は寄り添う存在と自己評価する一方、子どもは必ずしも同様に感じていないことが明らかとなった。ただし、母親に対する「尊敬している」という評価は高く、母親が子どもにとって価値観や行動の規範となる存在であることが示唆された。

表1 父親と母親の行動・態度に対する生徒と保護者自身の評価

		何かと相 談する	うまくい っている	尊敬して いる	期待して いる	父（母） の様に	何かと口 出しする	あまりか まわない	言う事 を聞く	人に親切 を教える	コワイ 存在
父親	生徒	3.19	1.77	1.82	2.04	2.20	2.57	2.99	2.58	1.93	3.00
	父親	2.61	1.72	2.23	1.63	2.83	2.36	3.08	2.74	1.54	2.52
	生-父	+0.58	+0.05	-0.41	+0.41	-0.63	+0.21	-0.09	-0.16	+0.39	+0.48
母親	生徒	2.77	1.65	1.81	1.94	2.30	2.18	3.23	2.46	1.61	3.06
	母親	2.21	1.79	2.34	1.82	2.96	2.20	3.08	2.92	1.39	2.78
	生-母	+0.56	-0.14	-0.53	+0.12	-0.66	-0.02	+0.15	-0.46	+0.22	+0.28

4.2 各群の生徒自身の評価

表2から生徒の評価では、いずれの群でも母は「うまくいっている」「尊敬している」「親切を教わった」などで肯定的に評

価されやすく、父は「何かと相談する」が高く相談しにくい存在として捉えられる傾向がみられた。部活動別には、運動部で母への肯定評価が比較的強く、文化部では父への心理的距離が表れやすい。無所属では母の「あまりかまわない」が高く、母の関与が相対的に弱い、または距離があると受け取られやすい点が特徴であった。

表2 各群の父親と母親の行動・態度に対する生徒と保護者自身の評価の差

		何かと相 談する	うまくい っている	尊敬して いる	期待して いる	父(母) の様に	何かと口 出しする	あまりか まわない	言う事 を聞く	人に親切 を教える	コワイ 存在
父親	運動部	3.01	1.75	1.81	1.99	2.24	2.52	2.99	2.52	1.85	2.96
	文化部	3.40	1.79	1.80	2.13	2.16	2.62	3.08	2.51	2.06	2.99
	無所属	3.50	1.89	1.89	2.20	2.20	2.68	2.82	2.98	2.14	3.11
母親	運動部	2.61	1.56	1.75	2.21	2.21	2.18	3.22	2.52	1.58	3.08
	文化部	3.04	1.86	2.04	2.22	2.52	2.23	3.14	2.55	1.58	2.96
	無所属	2.93	1.72	1.82	1.84	2.30	2.16	3.45	2.70	1.86	3.07

4.3 現在と過去の親子関係の比較

本研究では、父親に関して、生徒は「あまりかまわない」「怖い存在」と捉える傾向がみられた。一方で、父親自身は「期待している」「尊敬している」といった項目を比較的肯定的に評価していた。このことから、生徒は父親を「距離があり、日常的な関与は少ない存在」と受け止めているのに対し、父親自身は「距離はあるが、その分、期待や尊重は伝わっている存在」と認識している可能性がある。つまり、父親の距離を保つ関わりが、生徒には「放任」や「近づきにくさ」として受け取られ、父親側の意図とは異なる意味づけがなされている点に、認識のズレが生じていると考えられる。母親に関しては、母親自身が「何かと相談する」「人に親切にすることを教えた」といった項目を肯定的に評価する傾向がみられた。一方で、生徒の評価では、「何かと相談する」ことが必ずしも同じ水準で肯定的に捉えられているとは限らなかった。これは、母親が日常的に関わり、声をかけている行為を「相談に応じて」「寄り添っている」と認識しているのに対し、生徒はそれを「口出し」や「管理」として受け取っている可能性を示している。つまり、母親の関与の多さが、生徒にとっては必ずしも「相談のしやすさ」と一致していない点に、母子間の認識のズレが表れているといえる。本研究の結果から、現代の親子コミュニケーションは、親子が常に同じ認識を共有する関係ではなく、一定のズレを含みながら成り立つ関係であることが示唆される。親は期待や配慮の意図をもって関わっている一方で、生徒はそれを自分なりの基準で解釈しており、関わりの意味が必ずしも一致していない。

4.4 運動部・文化部・無所属の違い

運動部・文化部・無所属によって、親子の認識には明確な差異が確認された。無所属では、生徒が部活動で家にいない時間が短くなることから、父親は「一緒に過ごす時間」を高く評価したと考えられるが、生徒は関与の少なさを「距離」として認識しており、評価のズレが見られた。特徴的なのは運動部である。「期待している」「何でも言うことを聞く」等の項目において、父親は高い関与を示した。しかし生徒側は、これを「指導」ではなく「怖さ」として受け止める傾向が強く、親の熱意と子の受容の間に大きなズレが生じていた。対照的に文化部では、父親は対話を意識しているものの、生徒の評価は肯定的でも否定的でもなく、双方の関心が希薄である点で、逆説的に不一致が小さい状態にあった。一方、母親については、部活動の属性にかかわらず親子の認識差に有意な変動は見られず、子の外部環境に左右されない安定した関係性が示された。以上より、「運動部はコミュニケーション量が多く、親の支援が必要」という当初の仮説は支持されたといえる。しかしその一方で、関わりが多くても、父親の意図が生徒に同様に受け取られているとは限らず、運動部においても親子間の認識のズレが残ることが明らかになった。したがって、「部活の話をするれば親子仲が良くなる」という通説は修正が必要である。

5. 結論・今後の展望

本研究は、親子関係のあり方が約20年間でどのように変化しているのか、また部活動によって親子関係の違いがみられるのかを明らかにすることを目的として分析を行った。松井洋(2001)の先行研究と本研究の結果を比較すると、親子関係の基本的な構造は約20年を経ても大きくは変化していないことが明らかとなった。すなわち、親は自身の行動や親子関係を比較的肯定的に捉える一方で、子どもは必ずしも同様の評価を示しておらず、親子間の認識のズレは現在においても一貫して存在している。一方で、親の役割の捉えられ方にも変化がみられる。松井洋(2001)が指摘したように、「親のようにになりたい」といった将来像に関する評価は本研究においても低い傾向にあり、親は理想的な人物像としてよりも、生活を支え、価値観や行動の手本となる存在と捉えられている。このことから、親子関係は大きく変化したのではなく、基本構造を保ちながら、その役割や意味づけが時代とともに変容してきたといえる。また、運動部と文化部と無所属の比較については、本研究の結果、部活動の違いは親子関係の基本構造を大きく変えるものではないが、父親の関わり方の受け取られ方には影響を与えていることが示された。帰宅部では父親が時間の共有をもって関係を肯定的に評価するのに対し、生徒は関与の質を重視しており認識のズレがみられた。このデータは在籍校のみのデータであるため、偏りがあると考えられる。今後は、在籍校のみの指標の調査から複数指標を用いた調査へと発展させていきたい。

6. 引用・参考文献

- ・ 松井 洋 (2001)「青年期における親子関係の構造と変容」『教育心理学研究』第49巻, 第2号, pp.170-182
 - ・ 内閣府 (2023)『令和5年版 子ども・若者白書』内閣府
 - ・ 総務省 (2022)『青少年のインターネット利用環境実態調査 報告書』総務省。
 - ・ 文部科学省 (2021)『中学校・高等学校における部活動の現状と課題』文部科学省。
 - ・ 田中 恒一・山本 恒一 (1998)「親子関係における認知のずれに関する研究」『発達心理学研究』第9巻, 第1号, pp.45-56
- 『令和5年版 子ども・若者白書』

なぜ日本の高校生は英語を早く読めないのか

The reason why Japanese people cannot read English speedy

新潟県立新潟高等学校 2年4組 渡邊聖空 2年5組 和田ひかり
2年9組 齋藤優仁

Abstract: Many Japanese learners are not good at reading English sentences. This paper investigates the factors that constitute barriers for Japanese readers of English by identifying hypothesized factors and examining their significance through multiple regression analysis. The results of the experiment did not yield any significant factors, so we plan to adjust the experimental methodology going forward.

Keywords: English, WPM, Multiple Regression Analysis

1. 研究背景

2024年度のGTEC Advancedの英語リーディングにおける新潟高校1学年の平均は94WPMである。また、一般的な日本人高校生の平均読解速度は約73WPMであると言われる[1]。しかし、大学入学共通テストの英語のリーディングを時間内に解き切るためには150WPM程度が求められる[2]。したがって、新潟高校の1年生及び日本人高校生の平均読解速度はいずれも、大学入学共通テストで求められる水準を大きく下回っており、読解速度の遅さが学習成果や受験結果に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

2. 研究目的・意義

日本の高校生が、英語読解において読解速度の面で大きな課題を抱えているという現状があり、本研究ではこうした現状が生じる背景にはどのような要因が関与しているかに着目した。以上を踏まえ、「なぜ日本の高校生は英語を早く読めないのか」というリサーチクエスチョンを設定し、英語の読解速度に影響する要因を明らかにすることを目的とする。本研究の意義は、大学入試対策にとどまらない。現代社会では、学術論文などの膨大な情報を英語で迅速に読解する能力が求められている。本研究で、英語の読解速度に影響する要因を明らかにすることは、今後の英語教育における指導法の改善に寄与し、学習者が効率的に英語の情報を活用できる社会の実現につながると考えた。

3. 研究方法

【実験1】2025年8月、本研究の班員3人を被験者とし、250語程度の英文（ChatGPTで作成）を11題とそれらの内容に関する正誤問題（ChatGPTで作成）10問を用いてWPMを求める実験を行った。本研究では、英語の読解速度に影響を与えると考えられる要因を検討するため、班員の経験を踏まえ、14の評価項目を設定した（表1）。各英文について、これらの項目で評価し、得られたデータを用いて重回帰分析を行った。6つの説明変数の設定方法は表2に示す通り。実験1では、英文における単語の難しさの指標として、CEFRの語彙レベルが比例尺度として扱えると仮定し表2に示すようにx1を設定した。文法構造の難しさについては、第一文型から第五文型までを難易度が等間隔であると仮定しx2を表2のように設定した。

表1 14の評価方法

回数	評価内容	評価方法
CEFRレベルに関するもの	CEFR A1の単語数	CWLA
	CEFR A2の単語数	
	CEFR B1の単語数	
	CEFR B2の単語数	
	CEFR C1の単語数	
五文型に関するもの	SVの文章数	Chat GPT
	SVCの文章数	
	SVOの文章数	
	SVOCの文章数	
	SVOOの文章数	
	SVOCの文章数	
その他	関係詞が使われている文章数	
	1文に対する平均語数	
	イディオムの単語数	
	固有名詞の単語数	

表2 説明変数の設定方法①

説明変数の求め方
$x1 = (\text{CEFR A1の単語数}) \times 1 + (\text{CEFR A2の単語数}) \times 2 + (\text{CEFR B1の単語数}) \times 3 + (\text{CEFR B2の単語数}) \times 4 + (\text{CEFR C1の単語数}) \times 5$
$x2 = (\text{SVの文章数}) \times 1 + (\text{SVCの文章数}) \times 2 + (\text{SVOの文章数}) \times 3 + (\text{SVOOの文章数}) \times 4 + (\text{SVOCの文章数}) \times 5$
x3 = (関係詞が使われている文章数)
x4 = (1文の平均語数)
x5 = (イディオムの数)
x6 = (固有名詞の単語数)

【実験2】2025年12月、新潟高校2年生を対象に被験者の募集を行った。募集は、2学年全クラスに対してオンライン通信ツールを用いて調査協力を依頼する形で実施し、協力に同意した生徒11名が本研究に参加した。200語程度の英文と正誤問題10題（ChatGPTで作成）を被験者に読ませ、WPMを計測する。各英文について、語彙の難しさ、関係詞の数、一文の平均語数、イディオムの数、固有名詞の数を求めた。実験2では、語彙の難易度をCEFRに基づく語彙レベルによって定量化し、これを比例尺度として扱えると仮定して分析を行った。しかし、CEFRの語彙レベルは本来、連続的な難易度差を前提とした尺度ではなく、この点において、CEFR語彙レベルを比例尺度として扱うことには客観性の面で課題があった。そこで本研究では、語彙の難易度をより客観的に定量化するため、wordfreqを用いて各単語の出現頻度を算出し、各英文に含まれる単語の平均頻度を語彙の難易度指標として設定した。一般に、語彙頻度は語彙習得や可読性研究において語彙の難易度を表す代理指標として用いられており、低頻度語ほど学習者にとって処理負荷が高いとされている。本研究における語彙の難易度は、この頻度に基づく側面に限定して定義されている。また、実験2では各説明変数の尺度や値の範囲が大きく異なっていたため、説明変数間の影響の強さを直接比較することが困難であった。そこで本研究では、すべての説明変数について標準化を行い、重回帰分析において各変数の

相対的な影響を比較可能とした。各説明変数の設定方法および算出方法は表3に示す通り。尚、実験1で扱った、五文型について(実験1における説明変数x2)は、客観的な定量化ができないと判断したため、実験2では扱わないこととした。

表3 説明変数の設定方法②

説明変数の求め方
x1=wordfreqの各単語のスコアの平均を標準化
x2=関係詞が使われている文章数を標準化
x3=1文の平均語数を標準化
x4=イディオムの数を標準化
x5=固有名詞の単語数を標準化

4. 結果・考察

【実験1】重回帰分析の結果、以下の式が求められた。

$WPM = 293.17 + 0.05x_1 - 1.01x_2 - 2.30x_3 - 9.57x_4 - 0.10x_5 - 2.85x_6$
 有意水準5%で検定すると、x4だけがp値0.027と $p < 0.05$ を満たし、yに対する有意な影響を持つことがわかる。他の変数(x1, x2, x3, x5, x6)はWPMへの影響が統計的に有意ではないと言える。図1はWPMの予想値と実際の値を比較したグラフである。今回の実験から、有意であると判断できた「平均語数」が増えるとWPMが減少すると言える。他の項目については、有意だと判断できないので、現時点で相関があると言えなかった。今回は、実験の対象が3人でデータのサンプル数が小さかったことや、説明変数の設定の仕方に客観性がなかったことが影響していると考えられる。図1はWPMの予想値と実際の値を比較したグラフである。

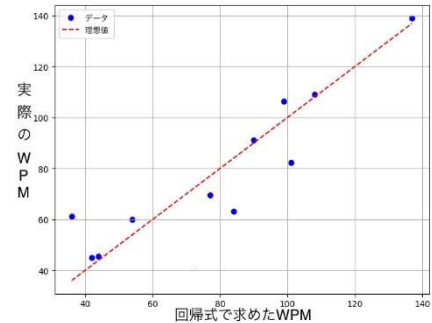


図1 WPMの予想値と実際の値①

【実験2】重回帰分析の結果、以下の式が求められた。

$WPM = 97.4 + 23.4x_1 - 15.2x_2 + 7.7x_3 + 43.0x_4 - 10.7x_5$
 しかし、全ての変数を有意水準5%で検定すると有意だとは判断できなかった。図2はWPMの予想値と実際の値を比較したグラフである。一方で、回帰係数の符号に着目すると、語彙の難易度(x1)は正の係数を示しており、頻度の高い語彙を多く含む英文ほどWPMが高くなる傾向が示唆される。この結果は、語彙頻度が読解処理の容易さと関連するという先行研究と整合的である[3]また、関係詞の数(x2)は負の係数を示しており、統計的に複雑な構造が読解速度を低下させる可能性が示唆される。特に高校生学習者にとって、関係詞構文は処理負荷が高いとされており、本結果は高校生の実感とも一致する。

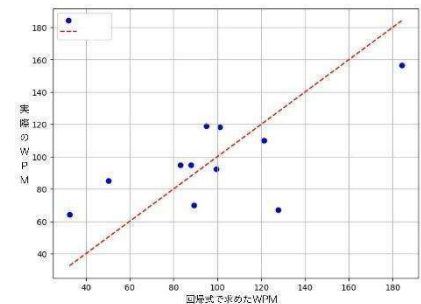


図2 WPMの予想値と実際の値②

5. 結論及び今後の展望

本研究ではサンプル数が少なく有意な結果が得られなかったため仮説を証明することができなかった。実験2では、実験1で問題であった、語彙の難しさの値を設定し直し、各変数を標準化したことで、変数同士の影響の大きさを比較することができた。今後は、サンプル数を増やして実験をして、有意な結果が得られるか検証したい。また、実験2では、CEFRレベルCの単語が含まれる割合や一文の長さが異なるなどの様々な種類の文章を130用意していた。しかし、十分な数の被験者を確保できなかったため、本来予想していた多様なデータを得ることができなかった。このことは、多くの生徒が忙しい年末に実験を行ったことや、実験に使った媒体の操作が難しかったことなどが、要因として考えられる。今後は、実験を行う時期や実験方法などを工夫するなどして、十分な数の被験者の確保にも努めたい。

引用文献・参考文献

- [1] 鈴木祐一 (2017) 「どれくらい速く読めるか?」 『高校生は中学英語を使いこなせるか? ~基礎定着調査で見た高校生の英語力~』 (pp. 17-28) アルク
- [2] 日本速読解力協会 (2024) . 【語数分析】 2024 年度実施 大学入学共通テスト英語の語数は3年連続6,000語超え <https://www.sokunousokudoku.net/media/?p=11047>
- [3] Victor Kuperman, Sascha Schroeder, Daniil Gnetov (2023). 「Word length and frequency effects on text reading are highly similar in 12 alphabetic languages」
- [4] 小林潤子 (2009). 「英文の速読力を高めるための指導方法考察」
- [5] 赤堀侃司, 東原義訓, 坂元章ほか 28名 (2023). 「情報Ⅱ」 東京書籍

特別支援学校に通っている知的障害の子どもたちにおける教育支援の提案と実践 ～現場の声を活かした支援の継続的发展を目指して～

Educational Support for Children with Intellectual Disabilities

修学館高等学校 2年2組 占部杏子

Abstract: This study proposes a "gamified" educational support to bridge the gap between the protective "circle of understanding" in special needs schools and the demanding expectations of the workplace. Through interactive board games, children practice self-determination and communication. Results show that while "self-understanding" remains a challenge, these activities effectively foster proactive expression, providing a preventive foundation for future social integration.

Keywords: Intellectual Disabilities, Circle of understanding Understand it yourself Gamification

1. 研究背景

知的障害とは、「認知や言語にかかわる知的機能」発達に遅れがあり日常生活・社会生活・他人との会話において困難な場面が多々見られることがある。課題研究で力を入れたかったのは、「特別支援学校に通っている知的障害の子どもたちにおける教育支援」だ。

教育支援を取り入れようと考えた理由は2つある。私には2歳年上の兄が特別支援学校に通っており、日常生活の中で言葉のキャッチボールができていないと感じる場面が多く、本人が途中で会話を断念してしまう様子を何度も見てきた。就職後に、対人関係で悩む場面が多くなっている現状を知ったことだ。これらの現状が研究において知的障害児への教育支援を志す動機となった。個々に合った支援を考え、少しでも人生の道りを明るく手助けできるように教育方法の提案・実践・改善の3つのサイクルに取り組みたいと考えている。

2. 研究目的・意義

研究目的は、「自己理解」を主に軸としておき対人関係における語彙力の向上や環境に柔軟に対応できる力を身につける+αで趣味や得意分野を通じた活動を教育支援に取り入れることで今後の就職活動や日常生活に良い影響を与えることができると考えている。多くの人たちが課題としているコミュニケーションに関しても困難の軽減を図ることができると考えられる。

3. 研究方法

(1) 指宿特別支援学校の教諭・志学館大学の教授にインタビュー

特別支援学校に通っている生徒の現段階の現状。特別支援学校卒業後の就職した人たちの現状の話聞く。

(2) ゲーム形式での実践

対象：小学生

内容：人生ゲームのようにサイコロを使用し、止まったマスに書かれたお題に沿って会話を行う活動を実施した。お題に答えられた場合は、スタンプラリーでシールまたはスタンプを自分で選んでもらった。

本研究で大事にしたいこと：「自己理解を深める」が最終的なゴールとなる

①自分自身の知らなかった部分のゲームを通して気づきを得る。②相手の話を聞く・聞いてもらうというサイクルを繰り返すことでコミュニケーションが楽しいと思ってもらえるようにする。

コミュニケーションに苦手意識を持つ知的障害のある子供たちに安心して自分の気持ちや考えを伝える経験を積み重ねることで、少しずつ自信を身につけ、社会に出た際のギャップを感じにくくするとともに、「人と話すことは楽しい」と前向きに捉えられるようになることを目指した支援である。

4. 結果・考察

(1) 現状比較

特別支援学校に通っている生徒の課題	卒業後の就職した生徒の姿
社会に対するイメージが具体的にもっていないため肯定的。支援者側が気持ちを読み取ってくれるため理解の輪の中で生活しているため受動的なコミュニケーションとなっている。	周りの理解の不十分さから「できて当たり前」とされる職場環境で、本人の努力と周囲の期待が空回りし本人の仕事に対する意識が低下している生徒が多い傾向がある。相談できない・伝わらないということからコミュニケーションが苦手になってくる。
社会場面の経験が少なく、校外実習が数少ない貴重な社会経験となっている。	一人の労働者として「成果」を求められ、ミスが業務に直結するという責任感という重圧に弱い。

(2) 研究結果

教育支援は道徳的支援ではなく、ゲームのように視覚化・感覚的にできる（サイコロを使うなど）友達と楽しく協力してできるすごろくゲーム型の活動が「自己理解」を軸と置いた語彙力の向上・柔軟に対応できる力に有効であった。活動中では自ら自分の話を言える回数が増え、友達の話最後まで聞こうとする姿勢が見られ対人関係への良い影響を与えることが出来たと感じた。もっと話したい＝「伝わった」という経験こそが他者とコミュニケーションを取るうえでの大切なことである。また、順番を待つ・協力するなど、社会生活に必要な力も同時に育まれたと考えられる。

【評価項目】	【具体的アクション】	【今回の評価】	【考察】
自己理解	お題の中に「自己紹介「得意なこと」などの自己理解に関するお題 言葉に詰まってしまい、答えられない子供も多くみられた。	×	ゲームを通して「自分の好きなこと」を発信する経験は、将来的に自分の特性（得意・不得意）を正しく理解し、社会で自分を説明するための「自己概念」の芽生えになったと考えられる。
意思表示	スタンプやシールを選ぶ際に誰かに決めてもらうのではなく自分で考えて動く。	○	自己決定に関しては、十分にできていると考えられた。自分の意思を表現することは自分を失わずにできる。
他人との協力	クイズなどの共同課題マスを設置。	△	答えを相談して決める様子あり。緊張して友達と話せない子もいた。この違いも大きな壁の要因の一つである。

5. 結論及び今後の展望

以下の研究結果（1）での2つの比較からどのようなコミュニケーションのケースを考え、特別支援学校に通っている知的障害のある子どもたちがこのような困難を抱えている中で支援者側がどれだけ手厚く子どもたちに経験豊富に対応できるかが大事だと考えられる「理解の輪」が広がるとともに支援の拡張も図り知的障害のある子供たちの困難を改善し、明るい未来を目指したい。またこの課題研究で行った研究が今後の学校での教育支援に適しているのかを教育委員会の方にお話を聞いたりし、大学での研究などでも、続けていきたい。

参考文献

黒河君江（2007年）『特別支援教育早わかり』・小学館
 佐々木正美 梅永雄二（2009年）『アスペルガー症候群就労支援編』・講談社
 柘植 雅義（2013年）『特別支援教育：多様なニーズへの挑戦』・中会新書 2218
 宮村直美（2025年）『知的障害特別支援学校教員のコミュニケーション支援に対する意識』・九州生活福祉研究会研究論文集』、19(1)、22-32
 草野恵美子・鳩野洋子・合田加代子・中山貴美子（2020年）
 発達障害児とその家族に対する地域支援に関する研究についての文献検討。『大阪医科大学看護研究雑誌』、10、43-50
 SOLE 令和6年。
<https://sole.education/labo/lower-elementary/mild-intellectual-disability/>
 「軽度知的障害のお子さんへの学習支援の重要性と具体的な支援方法」・2025年7月31日

文部科学省 令和3年 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material
 「障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」・2025年8月21日
 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 令和5年
https://www.nise.go.jp/nc/report_material/disaster/consideration/consideration06 「知的障害のある子どもへの配慮」・2025年8月6日
 田中里実・橋本 創一・小柳 菜穂・堂山亜希・野元明日香・田口禎子・細川かおり（2021年）
 「発達障害児療育の支援者が求める支援に関する検討」『東京学芸大学教育実践研究』18、93-99
 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/shougai-shakouyou/shisaku/jigyounushi/e-learning/hattatsu/characteristic 「発達障害の特性」2025年4月26日

ICT 活用の心理的抵抗を低減する授業デザインの探索的研究

Exploratory Study on Lesson Design to Reduce Psychological Resistance to ICT use

檜原学院高等学校 2年2組 岩田悠聖

Abstract: This study examines whether a policy-oriented lesson on marine pollution can reduce psychological resistance to ICT use. A mock lesson with teachers improved ICT skills, policy thinking, and willingness to act, suggesting that structured ICT-supported inquiry may help lower resistance and strengthen basic competencies.

Keywords: ICT Education, Psychological Resistance, Policy-Oriented Learning, ICT Skills, Behavioral Intention

1. 研究背景

GIGA スクール構想により ICT 環境は整備されたが、日本の生徒は PISA2022 で ICT 自己効力感が OECD 平均を大きく下回り、ICT 活用への心理的抵抗が依然として強い (OECD, 2023)。文部科学省 (2025) も、操作不安・情報処理負担・ICT 活用の意味づけ不足・行動への踏み出しにくさといった心理的要因が ICT 活用の主要な障壁であると指摘している。また、OECD は「ICT を思考過程に統合できていない国ほど自己効力感が低い」と指摘しており、日本の ICT 抵抗は、ICT を思考の道具として経験する機会の少なさが背景にある可能性がある。本研究では、利害関係者が多く政策的論点も複雑な海洋ごみ問題を、情報整理や可視化で ICT 活用の必然性が高く、その過程で心理的抵抗 4 要素の変化を検証しやすい題材として採用した。

2. 研究目的・意義

本研究では、リサーチクエスチョンを「ICT 活用への心理的抵抗に関連する 7 指標は、ICT を思考の道具として位置づけた授業デザインによって変化するか。」とした。仮説は「ICT を思考の道具として活用する政策構想型授業は、7 指標を向上させ、心理的抵抗の 4 要素を間接的に緩和する」とした。海洋ごみ問題を題材に授業を設計・実施し、平均値比較・t 検定・効果量で教育効果を探索的に検証し、ICT を思考の道具として使う経験が心理的抵抗 4 要素のどれに影響するかを明らかにすることを、重要な検討課題とした。

3. 研究方法

授業設計にあたっては、発問構造の調整等を複数回行い、構成や学習指導案などを整えたうえで、海洋ごみ問題を題材に政策構想型の模擬授業 (50 分) を教員 7 名に実施した。授業は①問題構造の理解、②利害関係者分析、③提案のまとめの 3 段階で構成し、ICT は情報整理・可視化の補助として用いた。初回は授業の実現可能性を専門的視点から検証するため教員を対象とした。心理的抵抗は「操作不安」「情報処理負担」「意味づけ不足」「行動ハードル」の 4 要素からなる概念と捉えた (文科省, 2025)。また、心理的抵抗は、短時間では直接測定が難しいため、先行研究に基づき行動・認知の変化を示す 7 指標を操作的定義とした。7 指標は心理的抵抗の 4 要素と対応する行動・認知面を捉えるため、代替指標として妥当と判断した。ICT 活用力 (Ainley et al., 2016) : ICT を用いて課題解決する力 → 成功体験が操作不安を低減、情報リテラシー (UNESCO, 2018) : 情報整理力 → 情報処理負担を軽減、協働力 (OECD, 2017) : 協力的に問題解決をする力 → 行動ハードルを低減、政策構想力 (Freeman, 1984) : 利害関係者を踏まえた構想力 → ICT 活用の意味づけを形成、社会接続力 (Dewey, 1938) : 学びを社会と結びつける力 → ICT 活用の必然性を強化、行動化意欲 (Prochaska & DiClemente, 1983) : 行動意図 → 行動ハードルを低減、IT 人材像の理解 (経産省, 2019) : 役割の理解 → ICT 活用の価値を強化。7 指標を授業前後で 5 件法により測定し、平均値比較・片側 t 検定・効果量 (Cohen's d) で分析した (有効回答 5 名)。7 指標が受講後に向上するという仮説を事前に設定していたため片側検定を用い、定量分析と自由記述の定性分析を統合して、授業が心理的抵抗のどの側面に作用したかを検証した。

4. 結果・考察

模擬授業の効果分析結果（定量分析）を以下に示す。（全て $n = 5$ である。）

表 1：7つの指標の受講前と受講後の平均値比較 ○ t 検定結果

指標	平均（受講前）	平均（受講後）	差分
ICT活用力	2.8	4	1.2
情報リテラシー	3.8	4.2	0.4
協働力	3.8	4	0.2
政策構想力	2.4	3.6	1.2
社会接続力	3.6	4	0.4
行動化の意欲	3.2	4	0.8
IT人材像の理解	3	3.8	0.8

ICT活用力 ($t = -2.45$, p 値 = 0.035) および行動化の意欲 ($t = -2.14$, p 値 = 0.050) において有意な差が認められた。また、政策構想力 ($t = -2.06$, p 値 = 0.054)、情報リテラシー ($t = -1.63$, p 値 = 0.089)、社会接続力 ($t = -1.63$, p 値 = 0.089)、IT人材像の理解 (p 値 = 0.055) については有意傾向が確認された。一方、協働力については統計的に有意な差は認められなかった。

○効果量の算出結果

ICT活用力 ($d=1.12$)、政策構想力 ($d=1.18$)、IT人材像の理解 ($d=1.35$)、行動化の意欲 ($d=1.35$) は非常に大きな効果を示した。一方、情報リテラシーと社会接続力は中程度の効果、協働力は小さい効果に留まった。

○定性分析（模擬授業評価アンケートの自由記述による）

授業後には「Canva でカレンダーを作りたい」「ChatGPT でアイデアを整理したい」など、ICT を活用した具体的な行動宣言が見られた。一方で、ICT 設備・教材研究時間・情報収集機会の不足、機器不具合や操作の難しさなど、ICT 活用を妨げる制度的要因も確認された。

○総合解釈

本研究の模擬授業は、ICT を思考の道具として使う経験が、ICT を使う意味の理解や行動のしやすさにどう影響するのかという新たな問いが生まれた。また、政策構想力や IT 人材像の理解の向上は、ICT 活用の意味づけを形成し心理的抵抗の緩和につながったと考えられる。一方で協働力の伸びは限定的であり、制度的要因や環境整備の不足が影響している可能性がある。ICT を使う必然性の高い課題では、ICT が思考の道具として機能し、その経験が意味づけ不足などの低減につながったと考えられる。さらに、ICT を用いた情報整理は Wiggins & McTighe の理解中心の学習観と整合し、思考の可視化を促進したと考えられる。

5. 結論及び今後の展望

本研究は、政策構想型授業が ICT 活用への心理的抵抗を緩和しうる可能性を示した。サンプル数や対象の限定性に課題は残るが、今後は①生徒対象での再検証、②サンプル数の拡大、③心理的抵抗の直接測定尺度の導入を進める必要がある。また、国際的な比較や教育政策への応用を視野に入れることで、ICT を思考の道具として活用する授業モデルを一般化する。今回の授業設計と検証を通じて、ICT 活用の心理的抵抗は学習経験の質に大きく影響されることが明らかになった。

引用文献

- OECD (2023). PISA 2022. <https://oecd.org/pisa/>
- 文部科学省 (2025). 情報活用能力の抜本的向上. <https://www.mext.go.jp/>
- Ainley, J. et al. (2016). ICILS 2013. <https://iea.nl/icils>
- UNESCO (2018). Media and Information Literacy. <https://unesdoc.unesco.org/>
- OECD (2017). Innovative Learning Environments. <https://oecd.org/education/>
- Freeman, R. E. (1984). Strategic Management: A Stakeholder Approach.
- Dewey, J. (1938). Experience and Education.
- Prochaska, J. O., & DiClemente, C. C. (1983). Stages of Change Model.
- 経済産業省 (2019). IT 人材需給調査. <https://www.meti.go.jp/>
- Wiggins, G. & McTighe, J. (2005). Understanding by Design.

前近代から近代への移行における社会構造の変容と規範的基盤の破壊分析

Analysis of Social Structural Transformation and the Destruction of Normative Foundations in the Transition from Pre-Modern to Modern Society

土浦日本大学中等教育学校 5年C組 道堀果歩

Abstract: This paper analyzes the transition from premodern to modern times not as progress but as a process of structural transformation. Through an examination of historical cases, it demonstrates that modernization entailed not only the formation of new institutions but also the destruction of the normative foundations of social order and daily life.

Keywords: Modern, Pre-modern, Normative Premise, Institutionalization, Reconstruction

1. 研究背景

近年、ポスト近代は近代の限界を克服する手段として肯定的に語られる一方で、その移行が社会や制度にもたらす影響についての検討は十分と言えないだろう。社会構造を一変させる事を意味する時代の移り代わりは、必然的に既存の制度や価値の破壊を伴う(ポランニー, 2009)が、何がどのように破壊されるのかは明らかではない。

この不確かさは法や国家、主体が揺らぐと予測される移行の中で無視できない問題であると言える。本研究では、社会構造の変化を価値判断としての進歩や後退ではなく、構造的変容として捉えつつ、その過程で当事者にとって破壊として経験された制度的・規範的变化に着目する。

なお本研究では「破壊」とは、既存の制度や文化、価値が変容すること自体を指すのではなく、その変容が市民の日常生活や社会関係の前提を大きく書き換え、従来の在り方を維持できなくなる過程を意味する。

2. 研究目的・意義

本研究の目的は、近代への移行を理想や進歩として評価する事ではなく、社会構造の変化、すなわちそれに伴う現代的価値観の破壊として捉え、その帰結を構造的に明らかにする点にある。(マックス・ヴェーバー1905)

社会の移行は一過性の変化ではなく、歴史上繰り返し生じてきた事象であり、ポスト近代への移行もその延長線上に存在している。そこで、本研究はこれからの未来に起こるであろうポスト近代への移行に伴い生じる構造的変容による破壊について検討するため、過去の移行によって破壊された構造を分析することを目的とする。

3. 研究方法

本研究では、前近代から近代への移行に伴って破壊された社会構造を明らかにするため、歴史的事例の分析を行った。ただし、この移行期は世界全体で統一的に定義されているものではなく、特定の年号をもって明確に区切ることができない。そこで本研究では、社会構造の変化が集中的に表出した重要な歴史的な事象(ホブズボーム、二重革命の概念)として①イギリスの産業革命②フランス革命③アメリカ南北戦争④ドイツ統一⑤日本の明治維新の5つを分析対象として選出した。

これらの事象を独自で設定したA政治・政権B経済・所有C法・社会D規範的基盤という4つの観点から検討し、近代化に伴う構造的変容の特徴を分析した。

なお本研究では、観点D規範的基盤は政治、経済、法制度の変容を根底で支える要素であるため、結果・考察において独立して検討する。

4. 結果・考察

様々な文献や教科書、解説動画などから各事象の特徴を整理し観点A-Cを表1に観点Dを表2にまとめた。

事象/観点	A:政治・政権	B:経済・所有	C:法・社会	事象	前近代的規範	破壊(失効)	近代的再編
英:産業革命	議会制の安定化	資本の私的集中	習慣→契約	英:産業革命	習慣・宗教道徳	共同体規範の失効	合理性・効率
仏:フランス革命	王政崩壊	身分特権の廃止	法の平等原理	仏:フランス革命	神授政権	神聖性の崩壊	人民主義
米:南北戦争	連邦権限強化	奴隷制経済の崩壊	市民権の再定義	米:南北戦争	奴隷制秩序	正当化矛盾の露呈	自由の再定義
独:ドイツ統一	国家権力の集中	関税・市場結合	成文法体系	独:ドイツ統一	王朝的忠誠	分権的正当性	国家理性
日:明治維新	中央集権社会	地租改正	近代法導入	日:明治維新	儒教的身分秩序	徳と身分の分離	法と国家

左表1：観点A-Cの分析/右表2：観点Dの分析

・表1に対する考察

近代への移行を分析しているのだから当たり前ではあるが、各事例に共通して政権の集中化、法制度の成文化という近代制度への転換が確認された。これらはしばしば進歩として語られるが、同時に習慣的秩序や地域的自治、身分的役割といった前近代的構造を解体した点に注目すべきである。

さらにはこれらの変化が政治・経済・法の各領域で個別に生じたのではなく、相互に連動しながら進化した点である。政治権力の集中は法の成文化を促し、成文化された法は経済関係の再編を正当化するという循環構造が見られた。すなわち近代とは制度の創設であると同時に、政治・経済・法が相互に補強し合う過程で既存秩序の解体を不可避とした構造的変容であった。

・表2に対する考察

各事例に共通して確認できるのは、社会的秩序を正当化する規範的基盤の転換である。

前近代社会では宗教や伝統、身分秩序が政治・法・経済の正統性を支えていたが、近代への移行に伴いそれらは理性や科学、国民意思、成文された法といった原理に置き換えられた。この変化は合理化として評価される一方で、従来の規範の上に成り立っていた生活や社会関係の前提を結果として破壊する過程でもあった。

すなわち規範的基盤の変容は、近代化における制度創設であると同時に人々の生活を支えてきた意味体系を破壊する構造的変容であったと言える。

5. 結論及び今後の展望

結論として本研究は、前近代から近代への移行における社会構造の変容を進歩としてではなく構造的変容として捉え、その過程で生じた規範的基盤の破壊を分析してきた。分析の結果、近代化は政治権力の集中化や法制度の成文化といった制度創設をもたらす一方で、宗教や伝統、身分秩序に支えられていた生活の前提を破壊する過程であったことが明らかとなった。すなわち近代への移行とは、新たな秩序の確立と同時に、人間の生活世界を支えてきた意味体系を破壊する構造的移行であったと言える。

今後の展望としては本研究の知見は、これから迎えるであろうポスト近代への移行を理解するための基礎的な視座を提供するものである。

近代への移行が制度創設と規範的基盤の破壊を同時に伴ったように、ポスト近代への移行においても、既存の法秩序や国家の正当性、主体の在り方が再編されると同時に、現代社会を支えてきた規範や生活の前提が破壊される可能性を十分に孕んでいる。今後は近代移行期との比較を通して、ポスト近代への移行において何が再構築され、何が破壊されるのかを具体的に分析していきたい。

引用文献

〈分析の表作成の参考・引用〉
 ちくま学芸文庫 カール・ポラニー 『大転換』(2009)
 メイン・ヘンリー『古代法 アーカイブ | LeBooks
 岩波文庫マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1989)
 ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』解説動画 <https://www.bing.com>
 産業革命 <https://www.y-history.net/appendix/wh1101-000.html>
 フランス革命 https://www.y-history.net/appendix/wh1103_1-013_1.html
 南北戦争 <https://www.y-history.net/appendix/wh1203-046.html>
 ドイツ統一 <https://www.y-history.net/appendix/wh0601-089.html>
 明治維新 <https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=1939>
<https://www.meijimura.com/about/history/>
日本国憲法の誕生

・グローバル化の世界史
http://www.1.u-tokyo.ac.jp/~kondo/Glob_worldh.htm
 ・NHK 高校講座世界史探求
<https://www.google.com/search?q=https://www.nhk.or.jp/kokokoza/sekaishi/&authuser=1>
 ミシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社 1977年
 ノーベルト・エリクス『文明化の過程』法政大学出版局 1977年
 エリック・ホブズボーム『革命の時代』岩波書店 1968年

河童伝説の多様性はどのようにして生まれたのか —地域・時代・社会背景から見る形成の仕組み— How did the Diversity of Kappa Legends Emerge? Analysis of Regional River Environments and Social Adaptation Processes.

佼成学園高等学校 2年E組 吉岡大翔

Abstract: What is called “water monster” and “Kappa” is found nationwide, with diverse traits, forms, and legends. This study examines factors shaping regional kappa images across Japan, arguing that geographic conditions and changing perceptions of rivers significantly influenced these variations over time.

Keywords : Kappa folklore、Regional variation、River environments、Social context、Disaster awareness

1. 研究背景

河童は日本各地に分布するが、地域によってその性格は大きく異なる。岩手県など東北地方では人を水中に引き込む「恐ろしい怪異」として語られる一方^[1]、福岡県など九州では相撲を好む「親和的な存在」としての側面が強い^[2]。また、新潟県中之口村（現・新潟市）などの地域では、家内安全や豊作に結びつく「水神」に近い伝承も確認される^[3]。こうした河童像の差異が、地域の河川環境や生活様式とどう関わってきたのか。先行研究の成果を踏まえつつ、地域社会の背景からその多様性の源泉を考察する。

2. 研究目的・意義

本研究は、河童伝説の多様性がどのようにして生まれたのかを、地理的要因・歴史的要因の二つの視点から明らかにすることを目的とする。各地の河川環境や人々の暮らし、社会状況の違いが、河童の姿や性格、役割にどのような影響を与えたのかを検討し、河童伝説が偶然や想像によるもの河童伝承を体系的に理解する枠組みを提示する。また、水難事故や洪水と結びついた妖怪伝承を明らかにし、民間伝承を現代の防災教育や地域文化の継承に活かすだけでなく、地域社会の課題や経験を反映して形成された文化的産物であることを示す。

3. 研究方法

本研究では、柳田國男『妖怪談義』（1977）や中村禎里『河童の歴史』（1996）などの先行研究および、民俗資料を収集、分析した。その上で、各資料の河童の特徴を地理的要因（各河川の流速や地形）および歴史的要因（治水工事による環境変化）と組み合わせて分析し、流域環境の違いによって各地方に伝わる河童の特徴（姿、性格、行動、役割）を比較する。

4. 結果・考察

調査の結果、河童伝説の多様性は、地域ごとの河川環境や地理的要因、伝承が成立した歴史的要因と深く関係していることが明らかになった。

4.1 地域ごとの河川環境や地理的要因

本研究では、河童伝承の発生要因を地理学的観点から検証するため、以下の文献（柳田國男『妖怪談義』、中村禎里『河童の歴史』、独立行政法人水資源機構「筑後川の河童伝説」）およびデータベース（国際日本文化研究センター（怪異・妖怪伝承データベース））に記載された河川のうち、具体的な目撃地点および河川の特徴が明確に記述されている五河川（猿ヶ石川、五ヶ瀬川、川内川、筑後川、中之口川）を抽出した。選定にあたっては、各地域の郷土史（『改訂中之口村誌（1987）』等）を参照し、伝承の具体性と一次資料の信頼性を担保した。

表1は、調査の結果、河童伝承の存在が明確に確認出来る河川の特徴とその河童の特徴を示したものである。表1より、流れが速く淵の多い河川や水難事故が起りやすい地域では、河童は人命を脅かす危険な存在として語られる傾向が強かった。例えば、猿ヶ石川、五ヶ瀬川、川内川周辺の上流の河童伝承では、河童が人を水中に引き込む、川に近づいた子どもをさらうといった内容が見られた。このことから、河童は水辺の危険性を象徴する存在として語られてきたと考えられる。

一方、流れが比較的穏やかで、人々の生活と密接に関わる水辺の筑後川や中之口川の下流域では、河童は悪戯好きで人間と関わる存在として描かれる例が見られた。そのため、河童は単なる恐怖の対象ではなく、身近な水辺の存在として語られている。

表 1：河川と河童の特徴

川名	猿ヶ石川上流	五ヶ瀬川上流	川内川上流	筑後川下流	中之口川下流
場所	岩手県遠野市	宮崎県北部	鹿児島県北西部	福岡県久留米市	新潟県西蒲原群
川の特徴	北上高地の山間部を水源とし、早瀬や淵が連続する急峻な溪流の様相を呈している	阿蘇火砕流堆積物を侵食したV字谷（高千穂峡）を形成しており、極めて急峻な河床勾配を持つ	周囲を山地に囲まれた盆地地形であり、シラス台地の特性上、豪雨時には急速な水位上昇と氾濫を引き起こしやすい特徴を持つ	河床勾配が 1/5,000 以下と極めて緩やかであり、満潮時には海水が遡上するほどの静穏な水面が広がる	新潟平野の低湿地帯を貫流しており、極めて緩勾配であるため、一部では自然排水が困難なほどの滞留性が見られる
河童の特徴	・川、淵、水辺と密接に結びつく存在 ・人や家畜を川に引き込む	・力が強く、イタズラや害を及ぼす存在 ・人や家畜を川に引き込む	・力が強く、イタズラや相撲好き ・昔侍を驚かせ、相撲をとった時に片手を切落とされた。	・相撲を取る、力比べをする ・凶暴さはない ・助けるとお礼がする	河童がキュウリ畑を荒らし、捕まえられた。

『北上川水系の流域及び河川の概要』（2024）、『五ヶ瀬川水系河川整備基本方針』（2021）、『川内川水系の流域及び河川の概要』（2016）、『筑後川水系河川整備基本方針』（2023）、『新潟県：白根郷を水から守る』（2025）より作成

4.2 伝承が成立した歴史的要因

河童に関する伝承は口伝が多く、後世の創作が含まれる可能性も否定できないため、正確な起源の特定は不可能である。しかし、平安時代末期の『今昔物語集』や室町時代の『下学集』には既にその記述が見られ、古くから人々の意識に深く根付いていたことは確実である。

この平安から室町にかけての時代背景について、国土交通省によると、当時の治水環境は「治水技術が未発達であった奈良～室町時代には、耕地は水を得やすいように湿地周辺につくられたために水害を受けやすく、当時は土木技術が未発達で、しかも資材もその地域で調達できるものに限られていたため、大規模な工事ができず、治水も耕地の流失防止を図る程度のものでした。」^[7]と述べられており、河童を恐れることで人々が川に不用意に近づかないよう促す役割を果たしていたと考える。一方で「戦国～江戸時代では、治水や土木の技術が発達するにつれ、大河川の氾濫によって生まれた平野で水田開発が始まり、各地で河川の特徴に 応じた治水事業が進められました」^[7]とも述べられている。これにより、下流域の河川周辺では農業用水や生活用水として川が安定的に利用されるようになった。その結果、河童は畏怖の対象から、地域の物語や教育の中で親しみやすい存在へと変化していったと考えられる。

5. 結論及び今後の展望

本研究は、従来、個別地域の事例整理に留まっていた河童伝承を、地理的要因・歴史的要因という二つの軸から横断的に分析した。その結果、河童伝説の多様性は、それぞれの地域が持つ水難リスクや水利用の歴史の変遷が、妖怪という象徴を通して結晶化したものであることが明らかになった。

結論として、河童は単なる架空の存在ではなく、地域社会が自然と向き合うための「適応の記録」であると言える。上流域における「自然への畏怖を体現する河童」は、未発達な治水環境下での生命維持のための警告であり、下流域における「地域社会との親和性が高い河童」は、安定した水利社会における自然との共生の象徴であったと考えられる。このように、河童の性格が地域や時代ごとに柔軟に変容してきた事実は、伝承が人々の生活実態や社会の要請に応える形で再構築される「動的な文化装置」であることを示唆している。

今後は、本研究で得られた河童伝承の変遷と、実際の古文書に残る水害記録や治水事業の年表を詳細に照らし合わせ、妖怪伝承の社会的機能をより定量・客観的に検証していくことが課題である。さらに、これらの研究成果を現代の防災教育や地域学習に還元することで、物語の力を借りて自然への畏怖と理解を深めてきた伝承文化の現代的意義を再定義することを目指す。

6. 主要引用文献・注釈

[1] 柳田國男（1977）『妖怪談義』講談社学術文庫

[2] 中村禎里（1996）『河童の歴史』三一書房

[3] 改訂中之口村誌編集委員会（1987）『改訂中之口村誌』

[4] 小山博（2016）「県内の河童伝承について」

[5] 独立行政法人水資源機構「筑後川の河童伝説」

<https://www.water.go.jp/chikugo/chikugo/kids/discover07.html>

[6] 国際日本文化研究センター（怪異・妖怪伝承データベース）<https://www.nichibun.ac.jp/cgi-bin/YoukaiDB3/simsearch.cgi?ID=1180001>

[7] 川と風土に関する懇談会編著（1995）『川と風土 望ましい河川像を求めて』建設省河川局河川環境課監修，財団法人リバーフロント整備センター

グリム童話「灰かぶり」の継母に見る母子の関係と子供の内的成熟

Mother-Child Relationships and Children's Inner Maturity as Seen in the Stepmother of Grimm's Fairy Tale "Aschenputtel"

清教学園高等学校 1年H組 鵜瀬苺愛

Abstract:

This study investigates the stepmother's psychological role in "Aschenputtel" regarding children's inner maturity. Through psychoanalytic literature reviews, it reveals that stepmothers help children integrate maternal duality and navigate developmental transitions. Future research will explore the motif's cross-cultural universality and analyze complex narratives for older children.

Keywords: Aschenputtel, Stepmother, Inner-maturity, Psychoanalysis, Family Romance

1. 研究背景

子供は読み聞かせを聞いている時、無意識に自分、または自分自身の抱える問題を主人公に投影している¹。グリム兄弟が刊行したグリム童話こと『子供と家庭のためのメルヒェン』に『灰かぶり (Aschenputtel)』として収録されているシンデレラ譚もその一つである。その物語の受容において、子供は継母に酷くいじめられている灰かぶりに深く心を動かされ、自分自身を重ねる。実際には継母がいない子供であっても作中の継母によるいじめに共感できるのは、作中で主人公にとって身近な脅威である継母に、子供が成長の過程で抱える自身の身近な問題を投影しているからだと考えられる。そこで作中における継母の役割という文学的研究と、母子の読み聞かせ行為という読書教育の研究の二つの観点を組み合わせることで、子供の心理的発達を『灰かぶり』の継母の作品受容に見ることができるのではないかと興味を持ち研究した。

2. 研究目的・意義

本研究の目的は読み聞かせを聞く子供が『灰かぶり』の継母に投影するものを明らかにすることだ。それにより継母というモチーフが子供に持つ役割を分析し、子供の内的成熟に与える影響を考える。

3. 研究方法

本研究では『灰かぶり』における継母について、子供が現実から作中の継母に投影する要素を三つに分けてそれぞれの先行研究を調査し分析を行なった。一つ目はフロイトの精神分析学における子供の空想の視点から、二つ目は深層心理学における子供の成熟過程の視点から、三つ目はユングの分析心理学における子供の人格発達の視点である。

1. 子供の空想に見る実母の中の継母

子供の見る世界で、母親は自分を愛し、守る存在であると同時に、自分を叱り、行動を禁じる存在でもある²。しかし子供の目線からはこの矛盾を認められない。母親の二面性を、母という一個の人間に内在する二面性だと理解できないからだ。そこで、物語における継母の受容を通じて、自分を拒否する母親を自身の空想世界や読み聞かせされる昔話の中で「悪い継母」に置き換える³。子供自身の内にある母親への愛を損なわないためだ。子供のこうした空想には普遍性があり、物語論ではフロイトの精神分析学の「分裂の理論」を援用し“ファミリー・ロマンス”と呼ぶ。「正常な子供は部分的にしか意識しない、それでいて部分的には信じている空想、あるいは白昼夢である」とされる⁴。

こうした精神分析学から物語論への援用を、『灰かぶり』の物語でも応用できる。物語を聞く子供の状況が、灰かぶりの実母と継母の状況に対応するからだ。子供は自分を叱る親は本当の親ではなく、不運な巡り合わせで現在親だと称している人(=と住んでいると想像し、優しい母、叱る母という二面的な母親の人格を、物語における実母と継母の二人に分けて空想する。継母は母であるにも関わらず灰かぶりを虐げるからだ。一方で、灰かぶりを援助する2羽の鳩や白い小鳥は娘を守り育てる母の化身に置き換える⁵。母親が急に“母親そっくりに化けて自分を騙す継母”に変身してしまった時、多くの子供は自分の力だけで立ち向かうことができない⁶が、『灰かぶり』をはじめとする昔話は、悪い

継母の存在と同時に子供を見守るよき母親の存在も子供に仄めかしている。

このような空想は子供にとって有益だ⁷。二人の母親は誇張された両極的な存在である⁸。子供は母親の悪の面を外面化し投影した“継母”に対して罪悪感なく心の底から怒ることができ、それによって本当の母親への愛情を失うこともない。時に優しく、時に厳しいという自分の母親の二面性の矛盾を統合し、一人の人格として理解する力がまだ身についていない子供達にとって、物語の中の継母は、母親へのネガティブな感情を健全なやり方で解放するための受け皿になるのだ⁹。

2. 子供の成熟過程に見る成長を促す力の擬人化としての継母

ところが成長する過程で母親の怒りや批判が子供への「圧倒的な打撃」¹⁰にならなくなる。その時、自分自身と二つの母親像が統合される。これを野村は“成長の節”¹¹と呼んだ。深層心理学において人間の一生に何度か起こる節で、外的要因が当人の成長を飛躍的に促すとされる。例えば子供が性的に成熟し青年になる変化がこれにあたる。変化の渦中で新たな環境に晒され、人は危機を感じる。

この“成長の節”は『灰かぶり』でも描かれている。自主独立の途上にある主人公にとって、否定的役割に設定された母親的存在(継母)と対決することが主人公自身の変化を促す¹²。継母の介入、いじめにより灰かぶりの人生は劇的に悲惨になるのだ。つまり、変化を促す力とは「古い存在形式にしがみついている者を無理やり引き離し、繋ぎ止めている綱を無残に断ち切って次の段階へ押し上げ追い立てる力」とされる¹³。子供が読み聞かせや空想で出会う悪い継母もその役割を担う。『灰かぶり』における継母のモチーフは、子供の“成長の節”において変化を促す力の擬人化なのだ。

3. 子供の恐怖の象徴としての継母

生後3、4ヶ月の子供は、母親との身体的接触を通しておいしいものを自分の中に取り込み、まずいもの、おそろしいものは全て吐き出す。これを小川は分析心理学に基づき口唇二分法¹⁴と呼ぶが、同じことが読み聞かせを聞く子供の内面にも起こる。鼓膜を震わせる母親の声という身体経験を通して、物語の中の恐ろしい存在である継母を外在化し「吐き出す」。これにより自身の内側には愛される存在としての“よい自分”だけが残る。この二分化により、自身が世界に肯定されている(=愛されている)という感覚を得るのだ。『灰かぶり』もまた口唇二分法を踏襲する。灰かぶり自身は継母に立ち向かわないが、実母という絶対的に肯定してくれる存在が口唇二分法における「吐き出し」なのだ。

4. 結果・考察

物語の継母と、自分を叱る現実の母親は、読み聞かせを受ける子供の内で対応関係にある。フロイトの“ファミリー・ロマンス”の状態の中で、恐怖の象徴としての継母を口唇二分法により外在化する。時に優しく時に厳しいという自分の母親の二面性の矛盾を統合し、一人の人格として理解することは、子供の内的な成熟につながる。しかし統合や成熟の過程で変化を促す力としての継母に対峙することは子供の能力では難しい。野村による“成長の節”にも近いこの状況は、今まで慣れ親しんできた古い環境や生き方を捨て成長することと同義だからだ。特に子供が青年へ成長するという外形変化期には、母の庇護を離れ独り立つという大きな変化が起きる。そして「いつまでも子供でいたい」という古い段階に留まりたい気持ちと、新しい段階に行こうとする気持ちの意識下の葛藤が起こる¹⁵。この過程が全うされるには、成長や年齢に応じたさらに別の物語が必要となるのだ。

5. 結論及び今後の展望

実母の霊である小鳥に助けられ、継母や義理の姉が罰を受ける『灰かぶり』は、勧善懲悪の物語としてハッピーエンドを迎える。幼少期にはこのように、絶対的に肯定し愛してくれる母親の存在が必要なのだ。しかし、野村による“成長の節”が人生において何度か訪れることから、さらに成長した先には勧善懲悪でない、さらに複雑な物語も必要となる。今後は幼少期以降の年齢に応じた物語に上記のような心理学的要素が適応可能かを考えていきたい。加えて各文化圏にある『灰かぶり』類話とも比較を行い、継母のモチーフが多様な文化圏においても普遍性を持つものなのかを検討したい。

引用・参考文献

¹ 小川捷之 (2021)「人格形成における空想の意味」松岡享子、森本真実『昔話と子どもの空想』東京子ども図書館 p.22
² 松岡享子 (2015)「子どもと本」岩波書店 p.140
³ マリーナ・ウォーナー、安達まみ (翻訳) (2004)「野獣から美女へ おとぎ話と語り手の文化史」河出書房新社 p.176
⁴ ブルーノ・ベッテルハイム、波多野完治・乾郁美子 (翻訳) (1978)「昔話の魔力」評論社 p.100
⁵ 三浦佑之 (2015)「増補新版 昔話に見る悪と欲望 継子・少年英雄・隣のじい」青土社 p.29
⁶ ブルーノ・ベッテルハイム、波多野完治・乾郁美子 (翻訳) (1978)「昔話の魔力」評論社 p.100
⁷ ブルーノ・ベッテルハイム、波多野完治・乾郁美子 (翻訳) (1978)「昔話の魔力」評論社 p.101

⁸ シャルロット・ビューラー、森本真実 (翻訳) 松岡享子 (編) (1918)「昔話と子どもの空想」小川捷之『昔話と子どもの空想』東京子ども図書館 p.38
⁹ 松岡享子 (2015)「子どもと本」岩波書店 p.141
¹⁰ ブルーノ・ベッテルハイム、波多野完治・乾郁美子 (翻訳) (1978)「昔話の魔力」評論社 p.100
¹¹ 野村法 (1997)「昔話は残酷か」東京子ども図書館 p.42
¹² 鈴木満 (2005)「図解雑学 グリム童話」ナツメ社 p.132-133
¹³ 野村法 (1997)「昔話は残酷か」東京子ども図書館 p.48-49
¹⁴ 小川捷之 (2021)「人格形成における空想の意味」松岡享子、森本真実『昔話と子どもの空想』東京子ども図書館 p.16
¹⁵ 野村法 (1997)「昔話は残酷か」東京子ども図書館 p.48

『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」の生成 —権中納言のモデルを考察する—

The generation of “The Gonnochunagon Who Could Not Cross Osaka” in Tsutsumi Chunagon Monogatari —Identifying the historical and literary model for the Gonnochunagon—

東京都立立川高等学校 2年C組 笹久保 親美 2年D組 樽見 英奈

Abstract: The purpose of this research is to identify the model for the Gonnochunagon in “The Gonnochunagon Who Could Not Cross Osaka” It is significant in rejecting the traditional view that Kashiwagi was Gonnochunagon. Analysis of Genji influences and historical figures shows that Kaoru is the closest literary model and Fujiwara-no-Yorimichi the most likely real model.

Keywords: Tsutsumityunagon Chunagon Monogatari, Gonnochunagon Who Could Not Cross Osaka, The Tale of Genji, Kaoru, Fujiwara-no-Yorimichi, Monogatariawase, model research

1. 研究背景

『堤中納言物語』は平安中期から鎌倉後期にかけて成立した十編の短編物語と一編の断章を包含する短編仮名物語集である。「逢坂越えぬ権中納言」は『廿卷本類聚歌合巻』内の資料から天喜3年5月3日に行われた六条斎院媒子内親王家物語合に小式部により提出されたものであることが判明している。十編中唯一作者と成立時期が明確である同作品に着目し、文献調査を進めた。伊勢物語における在原業平のように、主人公の権中納言にもモデルとなった人物が存在するのではないかと考えた。

2. 研究目的・意義

本研究の目的は権中納言のモデルを推測することである。特に、『源氏物語』中どの登場人物が参照されたのか、史上の人物の中で誰がモデルとなり得るのかを調査することにより、物語合という共同的文化空間が作品生成に与えた影響を検討する点、従来の説の正当性を検証した点に意義がある。

3. 研究方法

①文献調査

国文学研究資料館の資料を用い、堤中納言物語・物語合・権中納言の官歴・源氏物語人物論に関する先行研究を整理した。以下は権中納言のモデルについて言及のある文献の要旨である。

- ・土岐論⁸：『源氏物語』若菜上と「逢坂越えぬ権中納言」の間に人物の対応関係、季節設定、物語展開、表現・歌の類似など多面的で明確な影響関係があると指摘した。これらの一致から若菜上における源氏と朧月夜の関係が「逢坂越えぬ権中納言」の重要な著述材料として用いられることを示す。
- ・神尾論¹⁸：権中納言を特定の実在人物ではなく、物語成立時に複数存在した官職の一般的イメージと『源氏物語』の光源氏の若年像を重ねた象徴的存在として捉える点を強調。さらに、源氏物語の世界観や藤壺・朝顔との関係を背景に、作者が源氏の20代前半の姿を典拠に物語の「空白」を補う形で権中納言像を構築したとし、実在人物の特定は困難と結論づける。
- ・三谷論¹⁹：権中納言のモデルは光源氏・夕霧・薫の三方向から検討され、光源氏や夕霧とは部分的な類似にとどまる一方で、官職・場面構造・恋愛の不成立といった点で薫との一致が最も強く、薫像を基盤にしたパロディのキャラクターとして描かれていると論じられる。さらに、薫と大君の世界の静かな融合に対し、権中納言の場面は対話が成立せず空回りに終わる点が強調され、断片的描写を通じて『源氏物語』の恋愛像を批評的に再構築した作品として位置づけられている。
- ・神野籐論¹⁶：物語の主人公像は「源語から抜け出した薫君」とされる通説に加え、三位中将の登場が匂宮を思わせる点や、姫君に近づきながら成就しない恋の原因を優柔さに求める点から薫像が重ねられるが、柏木の身分差意識や必死の哀願に通じる描写も見られることから、薫だけに還元できない複合的な性格が示されていると論じる。さらに、語り手が権中納言を高く評価する一方で匂宮が受け入れない構図は、匂宮が斎院と等価に置かれる暗黙の図式を背景に、恋愛成就が禁じられた斎院世界にふさわしい物語文法として機能していると結論づける。
- ・井上論¹³：権中納言が中宮に自由に入出入り描写や帝からの特別な信頼、薫・柏木・夕霧を思わせる恋愛構造から物語の「権中納言」には撰閲家の若き嫡男像が重ねられ、特に平安中期～後期に実在した10～20代前半の権中納言たちの存在が背景にあると指摘される。また、18～22歳で権中納言を務め、中宮である彰子・妍子と同腹であった頼道の官歴が物語設定と強く響き合う点や物語合での頼道の影響力から、小式部が頼道を意識して物語を構想した可能性が高いと論じられる。
- ・陣野論¹：「宮」への思慕を示しながら積極性を欠く権中納言の姿は薫や夕霧と重なるものの、光源氏と朝顔の関係に直接対応させることは難しく、むしろ「権中納言」という官職が若き貴公子の出世像を帯びる点から、若い頃の頼道を重ねる読みが可能であるとされる。ただしモデルを頼道一人に限定することはできず、将来を嘱望され若くして亡くなった通房や、物語成立期に昇進した師実

など複数の若い権中納言像が背景にあり、「逢坂越えぬ権中納言」は特定個人ではなく複数の理想化された若者像を反映した人物造形であると結論づけられる。

②本文分析

「逢坂越えぬ権中納言」から権中納言の特徴(容姿, 年齢, 世間からの評価, 性格, 能力)を抽出する。

③比較分析

『源氏物語』の光源氏・夕霧・柏木・薫の特徴を現代語訳と原文から抽出し、権中納言との一致点・相違点を●×で判定した。

表 1 権中納言と『源氏物語』主要人物の特徴比較に関する表

項目	×	(%)	●	(%)
容姿	75.4		24.6	
世間からの評価	75		25	
性格	100		0	
能力	53.8		46.2	

項目	×	(%)	●	(%)
容姿	66.7		33.3	
世間からの評価	50		50	
性格	50		50	
能力	100		0	

項目	×	(%)	●	(%)
容姿	0		100	
世間からの評価	100		0	
性格	71.4		28.6	
能力	50		50	

項目	×	(%)	●	(%)
容姿	69.2		30.8	
世間からの評価	60		40	
性格	100		0	
能力	100		0	

4. 結果・考察

① 『源氏物語』との比較

・光源氏：恋愛の積極性・情熱性が権中納言と乖離している。

例)「いかなるにつけても、御心の暇なく苦しげなり」(花散里)

・夕霧：場面描写に類似はあるが性格が異なる。

例)「いとすくよかに重々しく、男々しきはひして、」(柏木)

・柏木：自己卑下的な性格や「兄貴肌」といった世間的評価は、権中納言の諧謔性や周囲と打ち解けない性格、そして「逢坂越えぬ」という結末と一致しないため、柏木をモデルとする必然性は低い。

例)「心おきてのあまねく、人の兄心にもものしたまひければ、」(柏木)

・薫：性格や能力で一部相違点があるものの、官職の一致・管弦の場面の類似・忍び寄りながら契りに至らない構造・「心の語らい」を求める恋愛観から高い合致度を示した。

例)「心にまかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず、よるづのこともてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり。」(匂兵部卿)

② 実在モデルの検討

井上¹³・陣野¹の「藤原頼通(18~22歳で権中納言)」「中宮(彰子・妍子)との同腹関係」「物語合の後見者である頼通との関係性」から、頼通が最も有力な実在モデルと判断される。

①, ②より、権中納言は、文学的には薫像のパロディ・歴史的には頼通像の反映・文化的には物語合という共同創作空間の産物として生成された複合的キャラクターである。

①より、権中納言は『源氏物語』の登場人物のうち光源氏・夕霧・柏木とは部分的な類似にとどまり、官職・恋愛構造で最も高い一致を示すのが薫であることが明らかになった。特に、忍び寄りながら契りに至らない展開は薫の特徴と強く重なる。また、神野藤論¹⁶で挙げられている柏木は性格・世間からの評価の大幅な相違から権中納言のモデルとは考えられないのではないかと。

②より、権中納言の実在モデルとしては、若年で権中納言となり、中宮と同腹であった藤原頼通が最も条件に合致しており、物語合の後見者としての立場からも作者が意識した可能性が高い。

以上より、物語合という共同創作空間の中で、文学的な薫像と歴史的な頼通像が重ね合わされ、権中納言というキャラクターが複合的に形成されたと考えられる。

5. 結論及び今後の展望

権中納言は『源氏物語』の薫を基調としつつ、藤原頼通の若年期をモデルとした可能性が高い。今後は、「源氏物語」を登場人物の特徴から分析するだけでなく、展開の面からもアプローチすること、史実の頼通の人物像とのさらなる照合を行うことで、より精密なモデル論が構築できると考える。

引用文献・参考文献

1 陣野英則 (2022). 『堤中納言物語論：読者・諧謔・模倣』. 新典社.
 2 後藤康文 (2023). 『『堤中納言物語』滴注』. 新典社.
 3 魏 冰冰 (2016). 「『逢坂越えぬ権中納言』のドラマツルギー」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 2 (65), 293-302.
 4 中野幸一 (2021). 『物語文学の諸相と展開』. 勉誠出版.
 5 辛島正雄 (2001). 『中世王朝物語史論』. 笠間書院.
 6 日本古典文学大辞典編集委員会 (1986). 『日本古典文学大辞典』. 岩波書店.
 7 鈴木一雄 (1980). 『堤中納言物語序説』. 桜楓社.
 8 土岐武治 (1967). 『堤中納言物語の研究』. 風間書房.
 9 安藤靖治 (2002). 『王朝文学論序説』. おうふう.
 10 目下田さく (2003). 『平安朝サロン文芸史論』. 風間書房.
 11 陣野英則 (2007). 「『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」論-生成・享受の「場」との関係-」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要/早稲田大学大学院文学研究科』, 52(3), 3-18.
 12 横溝博, 久下裕利 (2017). 『堤中納言物語の新世界』. 武蔵野書院.
 13 井上新子 (2016). 『堤中納言物語の言語空間：織りなされる言葉と時代』. 翰林書房.
 14 神野藤昭夫 (2008). 『知られざる王朝物語の発見 物語山脈を眺望する』. 笠間書院.
 15 神野藤昭夫 (1998). 『散逸した物語世界と物語史』. 若草書房.
 16 神尾暢子 (1982). 『王朝国語の表現映像』. 新典社.
 17 三谷栄一 (1983). 『平安物語』. 有精堂出版.
 18 林望 (2010-2019). 『謹訳 源氏物語 1-10』. 祥伝社.
 19 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 (1994-1998). 『源氏物語 1-6』. 小学館.
 20 三谷栄一 (1972). 『落窪物語；堤中納言物語』. 小学館.

説話における老婆像の分析—『宇治拾遺物語』を中心に—

Analysis of the Image of the Elderly Woman in the narratives: Focusing on “Uji Shūi Monogatari”

神村学園高等部 2年 鶴本七望

Abstract: This research analyzes the elderly woman in "The Sparrow Who Was Helped" in Uji Shi Monogatari. I study her mental strength, independence, and role in family and neighbor relationships. I also compare this story with later tales like "Tongue-Cut Sparrow" to see how the image of elderly women changed over time.

Keywords: Elderly women, Uji Shui Monogatari, "Broken-Leg Sparrow" type, Family relations, Female representation

1. 研究背景

「舌切雀」（または腰折れ雀）は、日本の代表的な昔話の一つである。原型は鎌倉初期に成立した説話集『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）の第48話「雀報恩事」にあるとされるが、現在広く知られている内容とは異なる点が複数存在する。その一つが、老婆の表象である。『宇治拾遺』において中心人物は「老婆と隣人の老婆」であり、雀を介抱する前者が善良性を、後者が悪しき性質をもって描かれている。しかし、現在広く知られているのは、「心優しい老人（爺）と意地悪な老婆」の構図であり、老婆には悪性のみが残されたかたちとなっている。このようなネガティブな老婆像のあり方は、先行研究においても指摘されている。中でも芥川龍之介の『羅生門』における老婆はその特異性が指摘されており、近代的青年の「影として構成された他者」であり「二重の副次性〈老いた〉〈女性〉をもつ」存在としての老婆が描かれたことが明らかにされている（倉田，2007）。

2. 研究目的・意義

『宇治拾遺』の第48話「雀報恩事」は、「隣の爺」型の代表的説話とされ、その特徴に勧善懲悪的な要素があげられる。主な登場人物である二人の老婆は、前者が脚の折れた雀を介抱し、後者はそれを見てわざと雀の脚を折ってから介抱するように、両者の善悪が強調されている。一方先行研究の中では、隣人間の対立関係とともに、家族間の対立や葛藤関係にその特徴が見出されている（小峰，1999）。また、両者の老婆ともに家の中でないしは社会の中での弱者であることが指摘され（佐久間，1997/金，2017/趙，2020）、佐久間（1997）によると「一緒に住んでいるのにもかかわらず、家族とのあたたかい繋がりのない孤独な老女」は律令体制という「弱者に厳しい社会体制」に基く存在」とされている。このような老婆の描かれ方は一面的ではあるものの、当時の実像を反映したものであり、特異性のあるものとは異なると言える。では、なぜその後の「舌切雀」において、悪性をもった老婆に変化していくのだろうか。本研究では「舌切雀」に関連する話群を対象に、老婆像の変化とその背景を調査する。さらに『宇治拾遺』におけるその他の老婆も視野に入れ、説話の中で老婆がどのように描かれているかを明らかにしたい。

3. 研究方法

①まず小池（1970）による「【第一系統】における婆-婆の型が【第二系統】夫婦である爺-婆の型に変化」した分析をもとに、老婆像の変化とその背景を調査・考察する。対象として『宇治拾遺物語』「雀報恩事」、元禄刊本『したきれ雀』、奥田忠兵衛版『舌切雀』、『日本五大噺』冒頭の『舌切雀』を調査対象とする。なお、このうち一部の作品は、小池の論文より掲載されていた内容を中心に分析した。

②次に『宇治拾遺』においてその他の老婆の登場する説話を対象に、その描かれ方を整理・分析する。『宇治拾遺』において明確な「老婆」が登場するのは、第48話（「六十ばかりの女」）のほかにも第30話「唐卒都婆ニ血付事」（齢八十ばかりなる女）、第57話「石橋の下の蛇の事」（老女）と数は多くない。そこで、後世の「舌切雀」における老婆が「夫婦の妻」とされていることや、第48話の老婆が子どもをもつ「母」であることをふまえ、ここでは妻や母、女房も分析の対象とした。

4. 結果・考察

①小池の分類によると、【第一系統】(『宇治拾遺物語』『雀報恩事』, 元禄刊本『したきれ雀』など)は老婆と隣の老婆型, 【第二系統】(滝沢馬琴『燕石雑誌』(文化8(1811)年出版), 浅草区蔵前森田町奥田忠兵衛版『舌切雀』(明治22(1889)年出版), 『日本五大噺』(明治34(1901)年5月出版)冒頭の『舌切雀』)は同一の家に住む夫婦であり, 「心優しい老人(爺)と意地悪な老婆」の型とある。『燕石雑誌』の場合, 中心にいるのは夫婦であり, どちらも雀をかわいがっている様子である一方で, 隣の家の老婆は冒頭よりすでに「はらぐろい」描写がなされている。『燕石雑誌』を原本とし, 奥田忠兵衛版『舌切雀』が出版されるが, ここでは明確に爺婆型となっている。ただし爺は冒頭から「慈悲深い」とされているのに対し, 老婆は仕事(洗濯)を進める中で障害となった雀を退治すると説明されており, 『宇治拾遺』の老婆と同様行為に移行する背景への言及も見受けられる。しかし, その後の『日本5大噺』では, やはり冒頭から「むかし, ある処に, よき爺と, あしき婆があつた」とあり, 善悪がはっきり分かれて示されている。この【第一系統】から【第二系統】への変化は, 善性をもった夫婦とりわけ爺と対を成す存在としての老婆像が強調されており, そこには倉田が言及した『羅生門』における他者としての老婆像との類似性も見受けられる。また, 変化の背景として, 鎌倉初期の女性が財産権や相続権をある程度保持していた一方で, 江戸における武家社会の儒教思想の浸透から男性優位の役割分担(男性は外で働き, 女性は家を守る)へと変化したことは関連性があると考察する。

②『宇治拾遺』に登場する妻・母・女房の特徴を整理すると, 42話中20話は物語中に登場するのみで, 明確な行為主体とはならず, 状況説明の一部として配置されている。一方, 42話中14話(妻:8, 母:3, 女房:3)は物語の進行や秩序を乱す存在として描かれ, 42話中6話(母:4, 妻:1, 女房:1)が善行を行う存在として肯定的に描写されている。攪乱的存在として描かれる場合, 感情的, 短慮, あるいは利己的といった性質があることが多く, 説話内の失敗や混乱の原因として機能している。この役割はとりわけ妻であることが多く, ここにもやはり中心的存在である夫と対をなす存在となっていることが伺える。また, 趙(2020)によると, 説話中の妻は「中心人物のとなり」にいる「引き立て役として登場する」とも分析されている。ただし, その行動の前提には自分を蔑ろにした夫への思いがあること(第83話)や, 他者との関係性を持つなど, 能動的な傾向も見取れる。一方, 善行を行う場合は, 自己主張の強さよりも, 家族や共同体への献身を通して評価される傾向にあり, その肯定性は一定の条件下に限定されている。この役割は母であることが多い。

5. 結論及び今後の展望

本研究の結果, 第一に「雀報恩事」から「舌切雀」への変化に中心人物との対なる存在としての位置づけが付与されたことを読み取った。第二に, 『宇治拾遺』における老婆の性質を部分的に持った妻や母の像であるが, 妻は夫との対比として物語を動かしたり秩序を乱す役割を担い, 母は子への愛情や優しさを象徴する存在とされる傾向にあることがわかった。ここに家庭内での孤独な存在と位置づけられた「雀報恩事」の老婆もあわせると, 家族の中でその多様な姿が見取れるものの, 家族の主たる者との関係性でその特徴が位置づけられていることがわかる。このように多くの説話が家庭内での対比に基づいて構成される一方で, 『宇治拾遺』30話「唐卒塔婆に血付く事」には家庭に属さない老婆が真理を知る存在として描かれており, ここで明らかにできた老婆像は一端に過ぎないと言える。また, 妻や母が分析の主な対象となったため, 明確な「老婆」像には課題が残る。今後は, 『今昔物語集』など説話の対象を広げることで, より詳細な分析を行っていきたい。

引用文献・参考文献

- (1)曲亭(滝沢)馬琴原作・京の蘆兵衛述(1901).『日本五大噺』, 文禄堂.
- (2)小峰和明(1999).『宇治拾遺物語の表現時空』, 若草書房.
- (3)三木紀人ほか校注(1990).『新日本古典文学大系 宇治遺物語』, 岩波書店.
- (4)倉田容子(2007).「『羅生門』と十九世紀末～二〇世紀初頭の老婆表象」.『F-GENS ジャーナル』8, 37-45.
- (5)小池藤五郎(1970).「記録を基礎とした「舌切雀」説話の研究: 銅鑄小本『舌切雀』から, 原稿本『新曲舌喜里寿々女』まで」.『立正大学人文科学研究年報』(8), 34-50.
- (6)佐久間久美子(1997).『宇治拾遺物語』に見る庶民の姿―巻三ノ十六雀報恩事より「老い」を生きるとは…」.『二松学舎大学人文論叢』59, 52.
- (7)趙智英(2020).「『宇治拾遺物語』における女性の描かれ方」.『同志社国文学』92, 91-104.
- (8)藤田貞一郎(1980).「江戸時代の家制度と女性の地位」.『同志社商学』, 101-113.
- (9)金智英(2017).「『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究」(※博士論文)
- (10)鳥取県公文書「新鳥取県史資料編 古代中世 I 古文書」<https://www.pref.tottori.lg.jp/kobunsho/> 2025年12月3日.